

教職大学院 Newsletter

No. 200

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since2008.4 2025.12.5(公開版)

もつれた網の中へ飛び込もう Let's dive to tangled net

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学 連合教職開発研究科

研究科長 木村 優

2008 年、福井大学教職大学院の船出とともに刊行された「教職大学院 Newsletter」が 2025 年の今号をもって No. 200 記念号を迎えました。Newsletter No. 1 (2008 年 4 月 1 日) から数えると 17 年 7 ヶ月余りの月日を経ての大台突入になります。

なお、前回の記念碑的 No. 100 刊行 (2017 年 7 月 8 日) は、No. 1 刊行から数えると 9 年 3 ヶ月での到達でした。一方、No. 101 (2017 年 7 月 31) から本号 No. 200 刊行への到達までは 8 年 4 ヶ月余りですので、先の 100 回の歩みよりもこの 100 回の歩みは少しだけペースが早まっていることがわかります。

このペースの早まりの理由の一つには、Newsletter の編集体制がこの 17 年をかけて一歩一歩向上してきたことが挙げられます。実際に、Newsletter の企画から記事収集・編集の一連の流れ、さらに内報版の共有や紙ベースとデジタルベースの刊行という工夫など、8 年前、17 年前に比べると現在の作業はかなりシステムティックになりました。これは一重に、この間 Newsletter 企画編集を担当されてきた大学院の同僚スタッフのご尽力、そして記事を期日に合わせて寄せてくださったすべての方々のご協力の賜物です。

そしてもう一つの理由は、現行・福井大学連合教職大学院にかかわる人々、システム、ネットワークもまた飛躍的に広がってきたことが挙げられます。Newsletter 刊行の歴史はそのまま福井大学連合教職大学院の歴史です。Newsletter No. 1 の記事からその歴史を紐解くと、福井大学連合教職大学院はその始まりからすでに福井県の学校と教師たち、そして教育委員会と教育総合研究所や各種教育センターとつながって船出しています。さらにこうしたつながりが、福井県外の学校、教育委員会、教育研究所・センター、大学、そして世界中の教育機関へと広がっています。

Newsletter No. 110 が刊行された 2018 年 4 月には、福井大学教職大学院は奈良女子大学・岐阜聖徳大学との連合教職大学院へと進化しました。2022 年には教員養成フラッグシップ大学の指定を受け、「主体的・対話的で深い学び」を基軸とした公教育改革の先導的役割を福井大学が果たすことになります。この具体的構想は Newsletter No. 158 で紹介

内容

巻頭言	(1)
200 号発刊に寄せて	(3)
コースだより	(16)
インターンシップ/金曜カンファレンス報告	(25)
月間合同カンファレンス等報告	(31)
お知らせ	(42)

されています。そして、Newsletter No.181 が刊行された 2024 年 4 月には、福井大学・岐阜聖徳大学・富山国際大学で新たに連合教職大学院を構成しました。

この間の福井大学連合教職大学院と各連携地域・学校・大学との協働の発展、全国的な教員研修改革の先導、そして国際的な教育改革支援の展開、それぞれの具体は Newsletter を追うことでよく理解することができます。こうしたネットワークの広がりには Newsletter のページ数にもよく現れています。2008 年度初期の Newsletter は 12～16 ページでした。それが No. 100 が刊行された 2017 年度では概ね 30 ページ、最近では 60 ページに及ぶものもあります。それだけ、たくさんの方が実践の省察と改革の挑戦を共有してくれているのです。

この Newsletter では、多様多層で、ややもすれば複雑で拡散的にも見える、こうした実践の省察と改革の挑戦を一人ひとりが「記録」として、そして「物語」として紡いでくれています。そのおかげで、学校教育や社会教育や教師教育の実践という複雑で曖昧模範な世界で動き働く「知」、すなわち「実践の中の知」が可視化され、その様々な「知」の関係の網の目も浮き彫りしてくれています。

福井大学連合教職大学院の教師教育システムは、エティエンヌ・ウエンガーらの「実践コミュニティ」の考え方を基盤にデザインされています。ここで Newsletter は、連合教職大学院にかかわるすべての人々の実践と理論の省察を支える媒体として機能します。また同時に、Newsletter は福井大学連合教職大学院の教師教育システムを通じてみなで協働で生み出してきた「知」の世話をする機能をもっています。私たちが協働で生み出し、見出してきた「実践の中の知」は、この Newsletter を通じて深く蓄積され、広く共有され、循環していくのです。

ある専門職は「研究」という「高地」に居座り、「実践」という「低地」に向けて一般化・標準化された原則を投げ落としてクライアントが直面する

実践の問題解決を促そうとします。一方で、別の専門職は「実践」という「もつれた網」の中に自ら飛び込んでいきます。そして、その「もつれ」に時にもがき苦しみながらも、「もつれ」の原因を仲間やクライアントと協働で研究し、解きほぐし、解決策を協働生成することで実践を前進させていきます。こうした行為に身を置く後者の専門職を、ドナルド・A・ショーンは「省察的实践者」と名づけました。

Newsletter が蓄積・共有・循環する「実践の中の知」は、私たちがそれぞれの文脈に根ざした複雑で、時に怪奇な「もつれた網」である実践において、どのように適切な行為を判断し、実行していくかのモデル（範例）を示してくれます。私たちは Newsletter の一つひとつの記事を読むことで書き手一人ひとりが何に挑戦し、時に何に悩み、何を感じ、いかなる「実践の中の知」を時々のもつれた状況で生み出し、用いてきたのかを「知る」ことができるのです。

教育実践は不安定で不確実で複雑で曖昧な、典型的な VUCA World です。この VUCA World の中で、私たちは適切な状況判断を常に行いながら、子どもたちや同僚たちをはじめすべての人々の学びと育ちを支え促していきます。そのために、私たちは VUCA World、すなわち「もつれた網」の中に自ら飛び込み、そこで仲間と協働省察する力を磨き、実践の中の「もつれ」を丁寧に紐解いていくのです。この協働研鑽を私たちの Newsletter が支えてくれるのです。

さあ、「もつれた網」の中に一緒に飛び込み、そこでの私たちの協働省察と協働行為を物語として紡ぎ、描き出しましょう。私たちが紡ぎ描く一つひとつ物語が、私たちの仲間を支え、そしてかけがえない子どもたちの今とこれからのウェルビーイングを支えてくれるのです。こうしてそれぞれの物語を紡ぎ続けながら、およそ 8 年後の Newsletter No. 300 記念号の刊行を楽しみにしましょう。



200 号発刊に寄せて

「2年間の意味」

福井大学教育学部附属義務教育学校/現授業研究・教職専門性開発コース修了生

青柳 宏治

教職大学院を修了し、教師となってもう 16 年目になりました。教職大学院で学んだ 2 年間は、教師としての私にとって本当にかげがえのない財産となりました。

インターンシップを始める前の事前履修のことをいまだに覚えています。メンターをお願いすることになる先生の社会科の実践記録を読ませてもらいました。衝撃でした。それは自分が今まで受けてきた授業、教育実習などで実践した授業とは全く異なるものでした。(福井県社会科のレジェンドがメンターになってくださったので当たり前です。しかし、そんなことすら分からない無知な自分でした。)子どもたちが学びにのめりこんでいく姿。様々な試行錯誤の末、南北問題解決の難しさを実感していく姿。すべての子どもの思考を受け止め、単元の学びを創っていく教師の姿。実践記録を読んでいくうちにそれらが頭の中にイメージされ、知らず知らずのうちにそこで生まれたわくわく感を追体験しているような感覚になりました。「社会科の授業はこんなにも奥深いものなのか!」そんな驚きとともにインターンシップが始まりました。

インターンで学校現場に出る時間は、本当に学びの多いものでした。忙しい先生方の代わりに何かできないかとインターン生二人で考えて始めた坂の下での朝のあいさつ運動。新しい学校像を子どもとともに作っていかうとする先生方の熱気。そして、あの温かく情熱にあふれた職員室の雰囲気。なにより、先生方と子どもが創り出す、わくわくがとまらない授

業の数々。メンターの先生の授業を参観し子どもの学びの様子を見取りながら、「子どもに何を伝えたいのか」「この授業狙いはなんなのか」を毎時間考えました。授業を参観するたびに社会科の面白さと奥深さを再認識できました。(メンターの先生になかなか質問に行けなかったのをいまだに後悔していますが。)社会科の授業以外にもたくさんの授業を参観しました。グループワークをしていれば対話だと勘違いしていた自分が、なぜコミュニケーションが必要なのかを考えることができた英語科の授業。1 コマの授業の流れを考えるだけでいっぱいだった自分に単元のデザインの重要性を教えてくれた数学科の授業。持久走を、ただタイムを縮めるためだけに取り組むのではなく、「そもそもなぜ走るのか」を考え、その題材の価値を考えることの必要性を教えてくれた体育の授業。今思うと本当に贅沢な時間でした。それに対して周りの先生方とは比べ物にならないグズグズな自分の授業。最初の研究授業の後にメンターの先生がおっしゃった「しゃべりすぎやな。」の一言。うなだれる自分。子ども主体の授業を創ることのなんと難しいことか…

そんな時に自分を助けてくれたのが、大学院でのゼミや大学院の先生との対話の時間でした。「あの子のあの行動の意味は何だったんだろう?」「あの授業の先生の手立ての意味はなんだろう?」「自分が実践するこの単元の内容の核心をつく問いってなんだろう?」現場でできた様々な疑問や気付き・悩みをたくさん語り合いました。(指導教官の部屋に質問に行くといつも 3 時間は話が止まらなかった。指導教官の

先生の見識の深さと授業にかける情熱にいつも圧倒された。みかんをいただきながら授業について話を聞いたのも良い思い出。) もちろん簡単に答えは出ませんでしたが、そうやって語り合う中で自分の思考が整理されたり、同級生たちの姿に励まされたりしました。そんな時間の中で、少しずつ自分の理想の教師像を描いていったような気がします。

現場に出て2年目にこのニューズレター第50号にこんな風に寄稿させていただきました。

今現在の私自身は、自分の理想とは程遠く、学級経営、授業実践、生徒指導のどれをとっても満足のいく実践はできていません。これが今の私の教師としての力量だと思います。しかし、そんな私ですが、現状を悲観はしていません。なぜなら、日々の実践に迷い、もがきながらも、自分自身の「授業で子どもを育てたい」という、理想とする教師像が明確にあるからです。(中略) このように、教師としての私の土台をつくってくれた福井大学教職大学院の取り組みは、今の私にとっても、自分の力量を高めるために本当に重要なものであることに変わりはありません。

今これを読むと、「教職2年目の若造が何を偉そうに」と思わないではないですが、教職16年目になった今でもこの気持ちは変わっていないなとも思います。現場で教師として働く中で、たくさん失敗もしましたし、子どもとの関わり方に悩むこともありました。そんな中でも「授業で子どもを育てたい」「子どもが主役の学びを創りたい」という思いがぶれることはありませんでした。特に、子どもと信頼関係を作ることすら上手くいかないことにとっても悩みましたが、ある時から自然と子どもが自分を信頼してくれるようになっていきました。振り返ると、その時期は、「子どもを主役にした授業が少しできるようにな

ってきたな」「子どもが学びを楽しんでくれているな」と自分なりに手ごたえを感じるようになった時期と重なっていたように思います。やはり、子どもが学校で過ごす時間の中で一番長い授業の時間を充実したものにする、その学びの価値を子どもが感じられるようにすることが教師にとって何よりも大切なことだなと感じました。そのときにインターン時代にメンターの先生がおっしゃっていた「授業で生徒指導する」の意味が少しわかったような気がしました。それからは教師としての引き出しも少しずつ増え、自分の理想像に少し近づけたかなと思います。

現在は、縁あって福井大学教育学部附属義務教育学校で勤めています。(赴任する際に驚いたのはインターン時代に指導してくださった先生方がいらしゃったこと。それを知って緊張感が100倍になった。) 私も教育実習生やインターン生の指導に関わるようになりました。自分を指導してくださったメンターの先生のような圧倒的な力量は私にはありませんので、子どもの姿から一緒に考え、一緒に学ぶことを大切にしています。教師として学び続ける姿勢を見てもらおうという気持ちで接しています。

大学院での2年間と現場に出てからの16年間を振り返ると、福井大学の教職大学院で学んでよかったと心から思います。大学院での2年間で私は、「自分がどんな教師になりたいのか」「そのために何を大切にすればよいのか」をじっくり考え、自分なりの答えを見つけることができました。教職大学院での経験がなければ今の自分はありません。この2年間で私は教師としてのスタートラインに立つ準備ができたのだと思います。そして、これからも子どもから学び、様々な先生方から学び続ける教師でありたいと思います。

考える身体のはじまりー揺らぎとともに問いをすくう

信州大学学術研究院(教育学系)/学校改革マネジメントコース修了生

大井 和彦

私の教職大学院での時間は、コロナ禍とともに始まった。結果として在学中に一度も福井の地を踏むことができなかったが、オンラインというツールを得たことで、全国に広がる様々な方々と繋がるという貴重な経験ができた。その過程で、私に最も大きな変化をもたらしたのは、知識・技能以上に“考え続けるための身体”を与えられたことである。繰り返し求められた省察の営みは、経験をただ積み重ねるのではなく、そこに沈んでいる意味をすくい上げ、問いとして抱き直すための訓練であった。結果として私の長期実践研究報告は、福井大学教職大学院の求めるものとは異なる質のものになったようにも思う。しかし、それを執筆する過程は確かに自分の奥底に届く時間であった。そして、現在においても私の思考を支える芯となっている。

一方で、大学院での学びは、自分の脆さを扱う方法も与えてくれた。弱さを単なる欠点としてではなく、他者と誠実に向き合うための起点として再解釈できるようになったのは、あの頃の省察の積み重ねがあったからだろう。この経験は今でも時に乱れる私の呼吸を整えてくれる。

この経験は、大学教員として働くようになって、学生との関わりの中に相似形を見出しているように感じる。学生たちは実にまっすぐで、同時に不安定で時に迷いを抱え、時に答えを求める。その姿に自分を重ねながら、彼らのそのような迷いに触れるとき、一緒に“揺らぎ”の形を眺めるようにする。迷いを否定するのではなく、そこからどのような問いが生まれるかということと共に実感したいためである。

加えて、省察の時間から概念化・構造化を営む力は、今の私の思考の骨格となっている。教育の問題を、

単発の出来事ではなく、文化・社会・思想・制度等の流れの中で位置づけて考える習慣が形成された。授業改善や研究の話になるときも、自然と「これはどんな構造の問題なのか」「どの概念と結びつくのか」と問う癖が働く。これは、教職大学院で学んだ“実践と理論との往還”が、私の中で思考の型として定着した証と言えるのだろう。

さらに、在学中の様々な方々との議論を通して、私は「人間にとってことばとは何か」という、昔に恩師から与えられた問いを自らの教育観の中心に改めて据えるようになった。ことばは単なる技能ではなく、私たちが世界をどのように受け取り、どのように他者と繋がり、どのように自分を生きるかという問いに深く関わる存在である。そして、国語教育を、世界と繋がり直す為の営みとしての人間教育と捉え直した視座は、現在の私の教育観を根底から支えている。さらに、私の中の関心は「ことばを介して誰とどのように関わるのか」という関係の質へと広がっている。同時に、省察もまた“自分を見つめる営み”と捉えていたことに加えて“他者との間に新しい意味を生み出す営み”としても感じられるようになった。思想は固定されるものではなく、場と人と経験とによって常に変容するものであることを日々確かめ続けているようにも思う。

教職大学院で過ごした時間は、今も私の中で静かに息づき、考え方として表れ、生き方の姿勢を問う鏡となっている。あの頃に得たものは現在進行形で私を作り続けており、これからの私もまた、その延長線上に“問い続ける者”として歩み続けるだろう。

歩き続ける意味を問う

福井県若狭高等学校/授業研究・教職専門性開発コース修了生

黒瀬 玲凱

教職大学院を卒業して、はや半年。あの頃を思い出のように語るほど遠い昔の話ではなく、されど記憶が鮮明に残っているほど最近の話でもない。半年という時間は、異なる環境に身を置いた人間が、前の環境で持っていた課題意識を忘れるには、十分な時間なのだろうか。

教職大学院にいたときの私の課題は大きく3つあった。「主体的に世界を広げられる人材を育てる授業の開発」、「生徒との適切な距離の取り方の模索」、「異なる目的を持った人たちが納得して前に進む合意形成の在り方の模索」の3つであった。

しかし、私が入学当初から持っていた課題意識は1つ目だけで、2つ目と3つ目はその環境における必要性から生まれた課題であった。2つ目の課題はインターン校での生徒とのやり取りの困難さから、3つ目の課題は院生内での合意形成の困難さから生まれた。環境に自分の未熟さを突きつけられ、それでも、その先の人間的成長を信じて、課題にひたむきに向き合い続けた。そんな2年間であった。

さて、今年の4月に教職大学院を卒業した私は、若狭高校で新採用の教員をしている。経験したことがない1学年8クラスという大規模校。副担任という一歩引いた立場。複数クラスでの複数コマの授業。新採用という権限の少ない立場。2年間で積み上げてきた信頼も一度リセットされた。教職大学院生としての黒瀬玲凱の姿はもうそこにはない。

結果として、私の課題意識は変化を迎えている。

まず、「生徒との適切な距離の取り方の模索」は一旦収束している。副担任という立場で、自分のクラスには週2コマしか授業で入らず、放課後に生徒対応をすることも少ない。インターン生と生徒の距離感よりも教師と生徒の距離感の方がやや遠く、自然と適切な距離に近づいていた。

また、「合意形成の在り方の模索」についても、現在私が合意形成を行わなければいけない状況にない。新採用という立場で新たな何かを始めることは少なく、個人の責任の範囲内でできることしかしていない。新たな環境はこの2つの課題を私の目の前にはおかなかった。

今私の目の前にあるのは、「主体的に世界を広げられる人材を育てる授業の開発」である。これはむしろできることが増えた。授業における自分の裁量と責任が増えたとし、SSH・研究部の所属となり、探究の授業をデザインする立場にもなった。むしろ、これだけに注力できるよう、先生方が配慮してくださっているようにも感じる。

そんな日々の中、ふと私が教職大学院で歩んだ意味を問い直した。あの時、死に物狂いで向き合った日々は今の私に生きているのだろうか。

答えはもちろん是である。今日の前にその課題がないからといって、その日々と向き合い、そこで得たものは無駄ではない。

「生徒との適切な距離の取り方の模索」を進める中で私は、他者理解とは、相手と自分の間の共通理解を増やすことであり、一方的な見取りによって行うものではないと学んだ。その学びから、授業内で生徒と双方向的なコミュニケーションをする方法を模索しているし、何かと用事を見つけて担任の先生に話しかけ、生徒の様子を語り合うようにしている。

「合意形成の在り方の模索」をする中で私は、多くの考えを持つ人と出会い、ぶつかり、理解しようとしてきた。多少納得のいかないことがあっても、その人なりの信念があることを理解し、自分の信念とどう折り合いをつけるか考えようとしている。

そして、この2つの課題は、今私の目の前にないだけで、担任になった時、プロジェクトを任された時、やりたいことができた時、いずれ私の前にもう一度現れる。目の前の課題の軽重は変われども、私は今もなお、教職大学院のころに歩いていた道を、生まれた時から歩いてきた道を歩き続けている。

今私が自分に問いかけるのは、「歩き続けた意味」ではなく、「歩き続ける意味」である。私の歩く意味は日々変化し、歩いた意味を積み重ねていく。卒業したときに立てたマイルストーンは十分遠くなった。されど、歩き続けた意味を結論づけるには、まだ十分な距離ではない。次のマイルストーンまで、その意味を問いながら、またひたむきに歩き続けよう。

教職大学院における Newsletter の意義

品川区立荏原第一中学校/学校改革マネジメントコース修了生

黒田 佳昌

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学 連合教職開発研究科「教職大学院 Newsletter」第200号の刊行にあたって、修了生として心からお祝い申し上げます。

私は2022年度（令和4年度）学校マネジメントコースに入学して東京サテライトに籍をおき、2023年度（令和5年度）に修了しました。この2年間はコロナ禍でしたが、社会の流れは少しずつ見通しが立つような兆しが見え始めた頃でした。当時、私が勤務していた中学校では、徹底した感染予防を継続しながら、学校行事を工夫して少しずつ再開するようになっていたことを記憶しています。教職大学院での学びも対面方式やオンライン、ハイブリット方式が軌道に乗り始めたようでした。私にとってZoomによるオンラインで福井をはじめ、全国の教員、教育関係者とのやり取りができるということは、画期的で大変勉強になりました。また自分が「時代の波に乗り遅れているなあ。」と痛感したものでした。

東京サテライトに籍をおき、南は沖縄県、北は北海道まで福井県だけでなく、全国の園、小、中、高等学校、義務教育学校、特別支援学校や全国教育委員会、福井大学をはじめとする教育系大学など、教員や教育関係者との対話を通してじっくりと自分の知らない教育の世界や教育実践、チーム学校の取組、また

実践による子どもたちの変容、教員おひとり、おひとりの悩みや生きざまに触れることができ、教育の広さや奥深さを実感し、自分自身の省察を行うことができました。

私にとって、2年間の教職大学院での学びの時間は、毎月のカンファレンスのラウンドテーブルでファシリテーターの大学の先生方や院生の話を傾聴することで、他者の思いや考えに深く入り込み相手の立場になって考えたり、自分を省察したりすることができたことでした。また日々の実践のなかで課題解決が見い出せず悩んでいるときに、自分の経験や考えを相手に伝えることで、実践を振り返るとともに思考を整理したり、転換したりすることで省察することができました。さらに「対話する」ことは、私にとってとても良い気分転換になっていました。そこで思考を変えてみることで、自分の視野の狭い考えや違う価値観に気付くことができ、新たな考え方に変わったり、終わった後に何とも言えない充実感を味わい気持ちがリフレッシュしたりして、「大変なのは、自分だけではない、みんな頑張っている。」と同士である院生たちから励まされ、背中を押してもらったことが何度もありました。

私は、長期実践研究報告の主題を『同僚性を育み、協働を通して教職の魅力を感じられる学校づくり』

とし、副題は「生徒が主語の学校づくりを目指して」としました。これは今も日々の教育実践で校長職として大切に、ブラッシュアップして進めています。学校教育の柱を「対話」とし、教師同士のラウンドテーブルや教師と学校運営協議委員、教師と保護者のラウンドテーブルなど、教師同士がなんでも話ができる関係性を高め、教師間の風通しを良くして同僚性を高め、どのような教育諸課題に対しても教師が個人で解決しようとするのではなく、同僚や保護者、地域、教育関係機関、民間事業者と協働し探究することで教育的諸課題の解決を図っていくようにしています。そうすることで知識やスキルが学校の組織力として向上していきます。目指しているのは、教師が協働して主体的に、そしてしなやかに立ち向かい、子ども一人一人の成長を喜び合い、教師という専門職の魅力を感じられる学校です。また生徒同士や生徒と地域、民間企業、教育関係機関など、多様な大人と「対話」を通して関わるができる「トーク・フォーカダンス」など、地域の教育リソースを積極的に活

用して生徒同士や大人同士、生徒と大人の「対話」の機会を創出しています。

さて「教職大学院 Newsletter」は、私たち院生にとってどのようなものであったか考えたいと思います。教職大学院では、自らの実践を省察しながら幾重にも重ね実践記録にしています。また教師は子どもとともに授業をデザインしていくことで、授業の改善や調整を図り、子どもと一緒に授業づくりをします。この実践を記録に残し、それをもとに仲間と対話を通して語り合うことが、教師の協働探究や省察の質を高めるものであると思います。そういった意味では、連合教職開発科 前研究科長の柳沢先生や現研究科長の木村先生が一貫して説かれていた「記録と対話のコミュニティの創発」において、「教職大学院 Newsletter」はまさに実践の記録そのものではないでしょうか。

これからも「教職大学院 Newsletter」の更なる発展をお祈り申し上げ、記念すべき第 200 号刊行お祝いの言葉とさせていただきます。

宇宙鯖缶開発から教育長まで、私を支える福井大学 連合教職大学院での学び

小浜市教育長/ミドルリーダー養成コース修了生

小坂 康之

『いろいろなとらわれを棄て～「生きたい、生きたい」と言い「伸びたい、伸びたい」と全身で言いながら子どもは今そこに未完の姿で完結している』ラウンドテーブルシンポジウムで伊那小学校の講演をお聞きし、「同じことを思う先生方がここにいる。これでいいんだ。」心からのほっこりとした嬉しさとあたたかい安心感が湧いてきた。同様に、教員も「よく生きたい、繋がりたい、伸びたい」と願っている。様々な価値観や専門性、学習観の違いから、それらが、「壁」となって時に現れてくるけれど、目の前で変容する子どもたちを見取ることで我々教員は一致できると、

学校訪問時のご指摘で深く共感させていただいた。

「となりの同僚は、今、何を思い、どんな目標に向かっているのだろうか。」「そうだ対話していこう。」と学校改革を進める大きな支援となった。

さらに先輩方の実践報告書を拝読すると、赤裸々な心の変化が見事に記されており、深く共感するとともに大きく揺さぶられた。教育改革に向かう先輩方のたくさんの心の声は、私の心にある「教員であらなければいけない」という余計なとらわれを外すきっかけとなった。うまくコミュニティを形成できな

かったときのこと、自分の見栄や欲を優先したときのことなどを素直に私自身のフレームを語ること、ができるようになった。また、相手の意見に傾聴し、問いを重ねながら、お互いの想いや考えを深める意義を理解し、「先生方と深く話したい」という思いが湧いてきた。

研究では、探究的な学習を経験した子どもたちがどう変容するか現象学的な手法を用いてインタビュー調査を実施した。長期間一緒にいた宇宙鯖缶開発の子どもたちの地平（隠れている部分）は結局、聞かなければわからないし、時に良かれと思って先回りしたことが意味のない場合も多くあると学ばせていただき、「まずは聞くことが大切」とその後の授業、学年運営や部長としての仕事に大きな影響を与えた。

今、公教育を支える立場として、市の教育や施策を左右する大きな選択を迫られる日々を送っている。周囲の雑踏やとらわれに惑わされず、まっすぐと物事を見取り、決定していくことを求められる。改めて

やっぱり正しいことが正しい、皆さんが良く生きるようにつながると思う。

しかし、本当にこれが正しいのか、時に迷い、周囲に相談しながら、情報を集め、それでも迷う。でもこんな時に「教育長だから」というとらわれを外し、堂々と迷う、何のためにしているのか、皆さんが幸せになるためにはどうすればよいのか、素直に本人に聞くことができるのは、大学での学びのおかげである。先生方、共に学んでいただいた同級生に心より感謝したい

結びに公教育の在り方が問われている大変重要な時期において、福井大学連合教職大学院での共創の学びをより多くの後輩たちに経験してほしいと思っている。私自身もまだまだ途上である。ぜひ、これからも実践的な省察を後輩たちや福井大学連合教職大学院のみなさんと続けていきたい。改めて、今後の福井大学連合教職大学院のご発展を祈念する。

教師として学び続けること

福井大学教育学部附属義務教育学校/現教職専門性開発コース修了生

佐々木 庸介

「教師として生きるとは、他者の『物語』を聴き、自分の『物語』を紡ぎ、編み直し続けることだ。」14年前、教職大学院で学んだことは今も自分のベースになっています。大学院では、人文学と自然科学の両方から学びやコミュニティのあり方について仲間と共に探究してきました。週3回のインターンシップでは、学生であった私も学校のコミュニティの一員として受け入れてくださり、先生方がいつでも授業を見せてくださいました。また、授業後は授業に対する思いや子どもの見取りを語り合う時間をいただきました。そして手厚いサポートの元、単元を通しての授業を経験させていただき、さらにはその授業への価値付けもしていただきました。

そして、インターンシップでの学びを週1回のカンファレンスで院生の仲間と共に編み直し、さらに大学の理科教育の先生や仲間たちと授業を作り、そのプロセスを定期的に省察する。この実践と省察のサイクルが大学院における私にとっての学びでした。サイクルを繰り返すことで、学部時代に「量的研究と質的研究」「教えることと探究すること」「個と全体」「障害児教育と理科教育」という二項対立のように存在していた学びの文脈を「中学校教師としての自分」に意味づけて統合し、自己の「物語」をつくりあげていくことができました。こうして、「様々な文脈を統合し、教師としてのアイデンティティを確立していくことが学びである」という、教師としての生涯学習観ができたのだと思います。私にとって教職大

学院は、諸先輩方が紡ぎ編み直してきた物語を受け継ぎ、仲間と共に自己の物語として編み直す、「教師として生きていくためのコミュニティ」だったので。

大学院修了後の14年間、私は中学校で教師として働いてきました。その中でたくさんの他者と出会いました。多様な先生方、保護者、同僚、先人、地域、子供、そして学校の「物語」は、私が教職大学院で描いた「物語」とは大きな隔たりがあったこともあり、時には「うまくいかない」という無力感、「自分だけ違う価値観なのではないか」という孤独感、「先生の授業では分かりません」と訴える子どもたちを目の前にして生まれる罪悪感から、自己の物語が大きく揺らぐ「実存的危機」も経験しました。しかし、そんな時に教職大学院の仲間や先生方、ラウンドテーブルで出会う福井県内外の先生方に支えていただき、同僚と共に物語を更新し続け、これまで教師を続けていくことができました。

このように、他者の物語を聴き、自己の物語を省察し、様々なコミュニティの中で危機を乗り越えて「世界」が広がり、新しい気づきが生まれていくことで、教師としてのアイデンティティが再構築されたのだと思います。そんなこともあって、「異質な他者の『物語』を聴き、危機を乗り越えて『世界』を広げることが自己の学びである」と実感が深まり、今でも大学院の時と同じように毎年実践記録を書いてラウンドテーブルに出て語ったり、本を読んだりすることを楽しんで続けることができます。そしてありがたいことに、ソニー子ども科学教育研究全国大会で授業を公開したり、マラウイ共和国のセカンダリースクールを訪問して授業づくりについて語り合

ったり、ラウンドテーブルでシンポジストとして理科の授業の物語を語らせていただいたり、全中理で福井の教員コミュニティについて語らせていただいたりと、本当に様々な場を経験させてもらいました。いずれも異質な他者と出会い、「実存的危機」を生じさせて省察することで世界を広げる学びだと捉え、自分自身の物語を更新し、語り続けています。そして私の「物語」が誰かの「物語」の一部として受け継がれているとうれしいな…と密かに思っています。

現在、私は福井大学教育学部附属義務教育学校で子供たちと共に学んでいます。本校はプロジェクト型学習における協働探究が重層的に行われています。その中で実感したのは「暗黙知を教えることはできない」ということです。子供たちにも物語があり、その物語に知識は埋め込まれています。特にプロジェクトの中で子供たちがファシリテーションを行うときや、理科の授業で概念を形成していくときなど、子供たちに言葉で教えられるものには限界があります。教師が願いを持ち、子供を見取り、共に対象を探究しながら省察し、物語を描いていくことで学びがつけられていくのだと感じています。

そしてこれは子供だけではありません。教育実習で学生が授業観を更新し続けること、地域の人や保護者と語り合って子供たちの学びを作り上げていくこと、教師として同僚やインターン生と共に温かなコミュニティをつくり、その中で知を紡いでいくこと—このどれもが「共に探究し、省察し、『物語』を描いていくこと」なのではないかと感じています。これからも、子供たち、仲間と共に未来を切り拓く学びをつくり、その物語を紡ぎ、編み直し、他者へと物語り、教師として生きていきたいと思います。

節目の年に、教員人生の学びを振り返る

福井市光陽中学校/現学校改革マネジメントコース修了生

鈴木 三千弥

「私の教員人生は、年休から始まった…」

私の学校改革実践研究報告(2013. 3)は、この一文から始まった。

おそらく、これを読んだ人は、「どういう人間だろう？」と疑問を抱いたのではないだろうか。

教員生活一日目から年休を取り多くの失敗を重ねた私が、現在、福井市光陽中学校の校長として勤務させていただいている。教職大学院を卒業して12年余りが過ぎたが、教職大学院での学びと多くの仲間を支えられながらここまで教員として歩んでくることができた。振り返ると、なぜか私の教員人生の中で、「1年目」に様々なことが起こる。いや、機会をいただくことに気がついた。そこで、この原稿執筆を機に、私の教員生活「1年目」に注目しながら、教職大学院での思い出や、現在の仕事にその学びがどのようにつながっているかを考えてみたい。

教員1年目、鯖江中学校で教員人生をスタート。

初日から年休取得、数々の失敗を重ねたが、多くの先生方に助けられた日々であった。そのときの授業観、生徒指導や進路指導観、部活動に対する考え方など教員としての基礎を学んだ。

教職大学院1年目、教員生活20年目の節目の年に入学。

3年連続3年生担任をしながら、至民中学校で進学主任を任され多忙を極めた記憶が蘇る。また、困難な生徒指導に追われながらも、仲間と共に日本初の「教科センター方式」「クラスター制」「70分授業の問題解決型学習」などを模索した。教職大学院では、日々の実践を「語りと傾聴」「授業参観記録」「長期実践報告」などをもとに振り返り、授業研究や協働実践の大切さ・楽しさを学ぶことができた。至民中や教職大学院で40代を過ごした7年間の協働的な学び

が、その後の管理職人生に大きく影響を与えることとなった。

教頭1年目、教員生活30年目の節目の年に、灯明寺中の教頭としてスタート。

当時、コロナウィルスによるパンデミックのため、世界中がロックダウン状態だった。学校現場では、3か月間の学校閉鎖、再開後は感染者等の対応に追われる先の見えない緊急事態の中、教頭として試行錯誤の毎日が続く。だが、教職大学院での学び、特に「問題(課題)解決」に協働で取り組む経験を生かすことができたと強く感じる。

例えば、教頭として校内研修を仕掛け、授業の見方や参観メモ・記録の取り方、「語りと傾聴」を中心とした授業の振り返りなど、若手教員の授業力向上の一助となることができた。また、困難な生徒指導や保護者対応に関しても、学年主任や生徒指導部長などミドルリーダーと共に、教頭として具体的な解決策と方法を考え、指示し、校長との連絡調整役を努めた。もちろん、校長・教頭両方が最前線で保護者対応に関わることもあったが、教職員に助けられ、校長とともに様々な教育課題解決に取り組むことができた。

校長1年目は以前勤めていた社中へ、今春光陽中学校へ異動。伝統ある光陽中学校1年目の節目の年にこの原稿執筆の依頼をいただいた。今年で校長3年目となるが、ここ数年は地球温暖化による世界的猛暑が続き、学校現場でも子どもだけでなく教職員の命を守る「熱中症対策」や、部活動地域クラブ展開、不登校の増加、SNSトラブルや教員不足など、課題が山積している。校長の仕事は、明確な学校経営ビジョンを示し、同僚教職員と協働で教育実践を行い、すべてのこどもの学びを保障することである。また校長として必要なことは「覚悟と決断」である。しかし、正直迷いが生じるときがある。そんなときに、同期の

校長や先輩校長経験者の方の助言をいただき、「それでよい」という一言で私の覚悟が決まるときがある。校長は最終責任者であるが、人に頼っていいし、冷静により的確な判断ができるように、仲間と共に考え、最後は覚悟をもって決断する。この点においても、教職大学院での協働的な学びが今の自分を支えていると感じる。

今改めて、教職大学院で何を学んだのかを自分自身に問い直してみると、以下の2つが真っ先に浮かんでくる。

一つ目は、「学び方」を学んだ。特に、「協働で学ぶ」喜びと意義を実感し体得することができた。

二つ目は、人とのつながりである。木村優先生（現福井大学大学院連合教職開発研究科 教授・研究科長）との「情動的実践」だけでなく、非公式な場での語りと傾聴はまさに「コミュニティ・オブ・プラクテ

イス」そのもので、今でも私の「協働実践研究」の礎となっている。当時いただいた参観記録やコメント、新聞記事などを読み返すと、心が揺さぶられる熱い思いが蘇ってくる。10年以上が経ち記憶は徐々に薄れていくが、文章として書き記されたものは永遠に残り、次の世代へと読み継がれていくものである。この Newsletter も 200 号続き、今後もたくさんの方々の知見や見識が読み継がれ、日本の教育が発展することを切に願っている。

最後に、教職大学院に関わる全ての方に感謝の意を込め、過去に記した「わたしのモットー」を再掲して終わりとしたい。

仕事の中に「遊び」がある
遊びの中に「学び」がある
学びの中に「喜び」がある
喜びの中に「豊かさ」がある

「学び続ける」を学ぶ

札幌市教育委員会/ミドルリーダー養成コース修了生

西野 功泰

教職大学院を修了してから、早くも6年の歳月が過ぎた。有難いことに、大学院とのご縁は途切れることなく続いている。私の後に札幌からは3名の高校教師が連合教職大学院での学びを求めて入学した。そうした中で、ニュースレター200号という記念すべき節目に、こうした寄稿の機会をいただけたことに心から感謝している。

長期実践研究報告書を書き終えた時、指導担当の方からこう言われたことを思い出す。「実践はこれからも続いていく。しかし、自らの実践を立ち止まって省察する機会是这样多くはない。意識して今後も書き続けることが大切である」と。当時の私は「わかりました」と答えたものの、実際には日々の忙しさを理由に、自らの実践を振り返り、言葉で表現することを

疎かにしていた。そんな私に、再びこのような貴重な機会を提案してくださったのもまた、その方である。

大学院修了後、私の仕事は大きく変わった。しかし、私が仕事をするうえで大切にしている判断基準は、6年前に全国から集まる実践者や研究者と対話を重ね、書籍を読み、指導担当者から指導と助言を受ける中で、ようやく見つけたものと変わっていない。苦しい時や道に迷いそうな時ほど、あの時の学びが拠り所となり、進むべき道を照らしてくれる。今回は、この数年の歩みを振り返りながら、最近感じていたある問いと向き合っておこうと思う。

平成31年（2019年）3月、私は連合教職大学院を修了した。報告書の末尾には、こう記していた。「この文章を書いている今も、世界を脅かす出来事が起こり、学校現場もその対応に追われている。変動は激

しく、不確実で、複雑で、そして曖昧である」そう、コロナ禍のはじまりだった。

当時の私は、学んだことを現場に還元しようと胸を高鳴らせていた。しかし、現実はまだで真逆の方向へ進んでいった。担任を任された新一年生たちとは、しばらく会うことができなかった。学校の存在意義や教師の役割が問い直されたあの日々。それでも、アフター・コロナを待つのではなく、ポスト・コロナの時代をどう切り拓いていくかを、大学院でつながった全国の同志たちと共に模索できたことは、今もかけがえのない大切な経験である。

転機が訪れたのは、その年の暮れだった。校長から告げられたのは、教育委員会への異動についての相談だった。不安はあったが、私はその話を受けることにした。コロナ禍で、教育行政が現場を支えようと懸命に働いている姿を、あることをきっかけに目の当たりにしていたからだ。もちろん、当時の私には、自分にどんな貢献ができるのか検討もつかなかった。ただ、新たな挑戦をしてみたいという漠然とした思いだけは、心の奥で芽生えていた。

令和3年（2021年）、四十歳を目前に、私は指導主事（高校担当係長）として札幌市教育委員会に異動した。着任した部署は、私以外はすべて行政職員。仕事の作法が違った。これまで積み重ねてきた学校現場での経験が、まるで通用しないように感じた。コロナ禍で職場内の交流も限られ、慣れない事務仕事に追われる日々。市立高校改革という大きな役割を担いながらも、思うように仕事を進められない現実。時間の流れが異様にゆっくりと感じた。

そんな時、私は係長職として、計二か月間保健所に派遣された。そこでは、医療関係者と連携してワクチンの調整を行ったり、感染者の自宅に電話をし、病状を確認したりする日々が続いた。「お母さん、子どもたちのためにも、早く病院に行ってください！どうかお願いします！」そう伝えることもあった。命と向き合う現場で働く中で、気力体力共にしんどくなっていたある夜、保健所を出て空を見上げ、思わず呟いた。「俺、何してるんだろう」と。

あまりにもはっきり声に出してしまい、自分ではつとした。そして、教師として生徒たちと過ごした日々の尊さ、それらが決して当たり前のもではなかったことを思いながら家へと帰った。帰り道は、札幌の中心部であるにもかかわらず、人氣がなく静まり返っていた。「学校で働きたい」そう叫びたかった。

現在は、毎朝満員の地下鉄に揺られながら職場へ通勤している。そして、私はようやく今の立場で自分の居場所をみつけ、果たすべき役割を明確に認識できるようになってきた。役割を全うするためには、様々な業務を同時に進めていかなければならない。主な仕事は、新しい学校づくり、そして、市立高校の次の10年を描く構想づくりである。

正解のない仕事に、多くの方々と知恵を出し合いながら手探りで取り組んでいる。説明責任は常に伴い、現場からアドバイスを求められる機会も増えた。関わる人の数も以前とは比べものにならない。賛同もあれば批判もある。正解はない。誰も答えを持っていないし、もちろん指示書は存在しない。

しかし、だからこそこの仕事は面白い。強がりではない。悩みは尽きず、心身の負担も少なくはないが、それでも私は、今の仕事に魅力を感じている。そして、度々思うことは、今の挑戦の根底には、大学院で得た学びが脈打っているということである。

あの時に得た思考の習慣が、今の選択や判断を支えている。あの時に築いた人とのつながりや関係性が、弱音を吐きそうになる私を励ましてくれる。そして、あの時に見つけた「北極星」は、今なお私が進むべき道を教えてくれる。

他方で不安もある。これからの10年、20年、自分の前に立ちほだかるであろう課題を乗り越えていけるのか、である。ワクワクする一方で、胸の奥にあるこのモヤモヤとした感情の正体が、いまひとつ掴むことができない。

仕事の質が徐々に変化していることは自覚している。全体像を把握することがますます難しくなってきた。全体が見えなければ、部分の意味づけや位置づけも正しく捉えられない。その結果、たとえ目的が明

確でも、手段を誤る危険がある。さらには、そもそも全体を誤解したままであれば、目的設定そのものを間違える可能性すらある。それに気づかずに仕事を進めてしまう自分を想像するだけで恐ろしい。

大学院での学びを改めて振り返ると、学び続けることの必要性を、頭だけではなく、実感を伴いながら学べた時間であったということに気づく。それは、知識や理論を得ることも大切だが、自分自身のものの考え方を問い直す経験だったと思う。

そして今、私は新たな思考の習慣を必要とする段階に立っているのかもしれない。かつて、10年後に直面するだろうと漠然と考えていた現実が、すでに目の前に近づいてきているのかもしれない。今の仕事の成果は、数年後、数十年後の学校の姿、生徒の姿として現れる。その未来のために、私はこれからも学び続けたいと思う。

マイペースに学び続ける人でありたい

南越特別支援学校/現授業研究・教職専門性開発コース修了生

野村 歩実

このニュースレターの依頼をいただいて、教職大学院に在学していたのは何年前か…数えるのが億劫になるくらいあっという間に年月が経ち、歳を重ねてきました。そして、毎度振り返りの機会をいただくたびに、私自身はその年月に見合うだけ人として、教員として経験を積み、成長できているのか、周りの諸先輩方、また、若い勉強熱心な方の姿を見て…「まだまだだなあ～」と反省するばかりです。20代前半は、そのことを焦りに感じており、20代後半で結婚して子どもが産まれてからは、仕事をある程度で区切りをつけて、切り上げることに“もっとこれもしたい”

“あれもしたい”という葛藤がありました。ただ、30代半ばとなった今は、また少し違って、周りの助けを借りながら仕事をしたり、子どもを優先したり、学ぶ時間を確保してもらったり、“いま”の自分のやらなければならないこととやりたいこと、できることを調整しながら『ワーク・イン・ライフ』の考え方で地に足をつけて生活ができているかなと思っています。それは、これまで私自身が周りの先生方に仕事を助けてもらったり、夫や両親と一緒に子育てをしてくれたりする中で、気付くことができました。しかしそれは、現在は安定していても、我が子の成長、職場の変化、周りの人の環境の変化などによってその都度

調整が必要になってくるだろうと思っています。そしてそれは、周りで一緒に働く先生方も一緒です。誰がいつそのバランスが崩れるかわかりません。今の職場では、そんな時“お互い様”と助け合える余裕がありますが、そんな言葉がどこの職場でもずっと言い合える環境が学校現場にもっと広がって整っていくといいなと感じています。

そのような視点や学び方、働き方の変化も教職大学院での経験や教員になってからも伴走し続けてくださっている教職大学院の先生方の存在が大きく影響しています。

教職大学院に在学中は学部からのストレートだったこともあり、学生気分が抜けないうまま学校現場で自由に学ばせていただいていた、メンターの先生には本当にご迷惑もおかけしたし、ご負担もあったことだろうと、今思うと反省ばかりです。それでも学生だからこその学び方や授業づくりに挑戦できたというのは、私にとってかけがえのない経験で、その時に「多様な子どもたちだから共に学ぶことの価値がある」という価値観は現在も私の教育観の骨組みとなっています。また、学生だからこそ、深夜までインターンシップについて院生室で他の院生と話した

り、授業実践の展開について他教科の専門の視点から意見をもらったり、長期実践報告書に四苦八苦しながらみんなで読み合って、意見しあったり…たくさんの人と協働することの価値を、実践をもって体感することができました。また、インター先の先生方、大学の先生方など様々な視点から意見をいただいたり、疑問を投げかけられることで、さらに自分の考えていることを深め、「なんとなく大事」ではなく、言語化し、周りの人にもその価値を伝えるようにするにはどう伝えればいいのかを考えたり、自身の実践を何回も省察することの大切さを学ぶことができたと感じています。そういった周りの人との対話や協働による学びの深まり、実践や子どもの姿を捉えなおす省察の経験は学校現場で働く中でも日々大切にし、意識して取り組んでいるつもりです。

そういった学びのスタイルを継続できているのも、教職大学院を修了して10年の月日が経ちますが、たまにラウンドテーブルに参加させていただき、県内外の実践を聞き刺激を受けたり、学校の研究などで助言者として教職大学院の先生方が来てくださったたり、実際に授業を見ていただいたりして、今も教職大学院とのつながりを感じているからかもしれません。特に、学部時代から参加している特支ゼミには現在も月1回程度参加させていただき、文献を検討しながら自分の実践を振り返ったり、その時抱えている課題を相談したり、実践報告を聴いていただいたりして、本当に今も日々の実践を支えていただいています。教員になって、自分が大切だと思っていたことが揺さぶられることは何回もありました（私自身それほど意思が強くないということもありますが

…）。揺さぶられるたびに立ち止まって子どもの姿を通して捉えなおし、「こういう世界が広がるといいよね」と一緒にその価値を再確認して、次の日の実践に背中を押してくれる。このように色々な形で学びを支えてくださっていて教職大学院の先生方は、修了して何年たっても心強い存在です。この場を借りて、いつも本当にありがとうございます。

最後に教職という仕事はどこまでやっても「これでいい」というゴールがなく、果てしなく続く仕事で気が遠くなるように感じていた時期もありました。しかし、30代半ばとなった今、自分自身の未熟さを自覚しながらも「学び続けられる」「いつまでも新たな発見や学びを感じられる」素敵な仕事だと、諦めではなく、ポジティブに、楽しみに捉えられるようになってきました。そう考えられるようになった一つに、一つひとつの仕事、目の前の子どもたちへのかかわりの結果が「今」全て見える、結果として出るわけではないと気付いたからです。今のこの学習、体験、関わりが未来を生きる成長した子どもたちがふと思い出し、考えたり、新しいことに挑戦してみよう、様々な人とつながってみよう思ったりする背中を押す一つのきっかけになってくれたらいいなと、願いを込めながら種をまく。教職ってそんな仕事だなと感じています。そう思うとそんな子どもたちの生きる『未来』が楽しみになってきませんか？そして、私自身も目の前の子どもたちを通して、様々な人とつながり、世界とつながり、考え方、捉え方に触れ、自分の考えもその都度捉えなおしたり、繰り上げたり、もっともっと世界を広げたりしていけたらいいなと思っています。



コースだより

書くことと対話すること

ミドルリーダー養成コース1年/奈良女子大学附属中等教育学校

山口 琢士

私は人と話すことが好きである。自分の考えを語ることも、他者の話に耳を傾けることも、どちらも教育において欠かせない営みだと感じている。特に教員にとって、生徒や保護者、地域の方々との対話は、日常的な業務の中核を成すものである。最近、教員同士が教育について語り合うこと、そして子どもを中心に据えた語りに触れることに、より強い関心を抱くようになった。

一方で、「書くこと」に対しては、昔から苦手意識があった。教職大学院への入学前、2025年2月に参加した福井ラウンドにおいて、松木先生が語られた「書かない教師はダメな教師」という言葉に、強い衝撃を受けたことを今でも鮮明に覚えている。当時はその意味を十分に理解していたわけではなかったが、大学院での学びを通して、少しずつその言葉を理解出来ているように感じている。

書くことは、自己との対話である。現在こうしてニュースレターを執筆している時間も、まさに自己内対話の最中である。私はこれまで、行動を優先するあまり、振り返りを後回しにしてきた。しかし、記録を残さず、内省も十分に行ってこなかったことに気づいた今、書くことの重要性を改めて実感している。

しかし、書くだけでは十分ではない。自分の実践を他者に語ることで、状況を知らない第三者からの問いや意見をもらうことができる。それにより、自分の考えが整理され、より深い省察が可能となる。書くことと語ることの双方があつてこそ、学びは深まるのだと実感している。

語り合うことは、一人では成立しない。対話には人と場が必要である。大学院での学びやラウンドテーブルでの対話を通して得られたものは非常に大きかった。先生や生徒の語りに耳を傾けることが、明日への活力となることも多かった。しかし同時に、自分の職場には対話の場が十分に存在していないことにも気づかされた。

そして、その場をつくることの難しさも痛感した。教員は皆忙しく、余裕がない。そうした状況の中で、落ち着いて対話する時間を確保することは容易ではない。しかし、だからこそ対話の場が必要なのだ。対話には、互いを理解するための対話と、よりよいものを共に創り上げるための対話がある。前者は信頼関係を築き、後者は創造的なすり合わせを可能にする。意見を交わしながらよりよいものを目指す営みは、教員同士や生徒との関係において、学校をより良い場へと変えていく力を持つと確信している。

まずはお互いを知り、信頼関係を築くための対話の場が必要である。現在は、有志による研修会として、対話を通して互いを理解し合う場を企画・実施している。また、生徒の中にも「対話」を探究のテーマに掲げ、生徒同士の対話の場を創出する有志団体が立ち上がった。私もその生徒たちも、同じような悩みや希望を抱えている。生徒とともに、この学校に対話の文化を根づかせたい。そのための学びを大学院や文献から得ながら、実践を積み重ねている。

現在はまだ「田起こし」の段階であり、すぐに成果が見えるわけではない。しかし、焦らず、楽しみながら、対話の文化を学校に根づかせる挑戦を続けてい

きたい。一人では成し得ないからこそ、同僚や生徒と協働しながら、実践と学びを深めていく。

海洋科学科を守り、未来へつなぐ挑戦

ミドルリーダー養成コース2年/福井県立若狭高等学校

小畑 有海

教員になって以来、私は一つの危機感を抱いてきた。それは、私が勤務する「海洋科学科」が将来なくなってしまうのではないかという不安である。「絶対に守りたい」という思いが、私が教職大学院に進学した理由の一つでもある。

福井県立若狭高等学校には4つの学科がある。そして私はその中の「海洋科学科」で水産を教えている。海洋科学科は平成25年に誕生した。以前は「小浜水産高校」という一つの学校だったが、地域の学校再編により統廃合され、学科として存続した。この統廃合は決して順調ではなく、生徒や地域から強い反対意見があったと聞いている。そのため、当時から勤務している先生方は「学校を潰してしまった」という自責の念を今も抱えている。私は海洋科学科の初年度に生徒として入学し、大学卒業後に教員として戻ってきた。高校生の頃から「海洋科学科を守らなければならない」と強く思ってきた。全国の水産高校に目を向けても状況は厳しく、定員割れや寮のキャパオーバーなどの問題を抱える学校も少なくない。数年前には、他県の水産高校の先生が統廃合の相談に来られたこともある。

こうした状況の中で、私たちは「どうすれば魅力ある学科をつくれるのか」「地域の中で生き残れるのか」を常に考えている。挑戦してもすべてがうまくいくわけではないが、トライ・アンド・エラーを繰り返している。ありがたいことに、私たち教員だけでなく、地域の方々も参画してくださっている。水産教員の強みは異動がほとんどないことである。県内唯一の水産系学科であるため、教員集団の顔ぶれが変わら

ず、外部との交流を継続できる。一方で、閉鎖的になりやすいという課題もある。そこで、地域の様々な立場の方を招き、カリキュラム検討や目標設定を一緒に行っている。令和3年度からは文部科学省の「マイスター・ハイスクール事業」に取り組み、海洋科学科の目標を「若狭地域の Well-being を実現するために、地域水産業の成長産業化に貢献できる人材育成」と定めた。つまり、学校を中心に地域全体の Well-being を目指している。

数年取り組んできた中で、私が注目したのは「保護者との連携」である。地域の方々は積極的に協力してくださるが、保護者の姿はあまり見えなかった。そんな時、PTA 役員の方と話す機会があり、「協力したいけれど、どうすればいいかわからない」という声を聞いた。そこで、保護者を学習コミュニティに巻き込む仕組みを考え、台湾の高校や他校の先生方にも意見をいただきながら、一つの実践にたどり着いた。それは、3年生の学校設定科目「地域活性化論」の授業に保護者を招き、生徒と一緒に対話するという取り組みである。11月28日に実施予定で、どんな対話になるのか今から楽しみだ。

うまくいくかどうかは分からない。しかし、一歩踏み出すことが大切である。海洋科学科の末っ子教員として、挑戦を受け入れてくれる同僚や、いつもついてきてくれる生徒たちに感謝しながら、より良いコミュニティ形成を目指していきたい。そして、この挑戦が全国の水産高校の参考になれば、これ以上嬉しいことはない。

伝えることの意味

学校改革マネジメントコース1年/敦賀市立中郷小学校

清水 裕子

教職大学院での学びの時間は、気付きの連続だ。そんな中でも私は貴重な経験をさせていただいた。それは10月のカンファレンスで話題提供をさせていただいたことだ。お話をいただいた時には、事の重大さも理解せずに引き受けてしまった。発表を終えた今となつては、自分の半年を振り返る良い機会をいただいたと思っている。

10月カンファレンスのテーマは、「新たな同僚を支え、世代を超えて学び合う」だった。私は、今年度に校内で実施した2回の校内研修会の様子を伝えることで、同僚性についての視点が提供できるのではないかと思った。研修会の内容や方法を丁寧に説明することで、話を聞いてくださる皆さんのお役に立てるのではないか。そんな思いで、自分なりに資料をまとめた。

その日の午後のグループ協議で、私の発表について触れていただく場面があった。「これまで実践報告は、『こんな準備をしてこんなことをして、こんな成果がありました。こんなことがうまくいきました』というものがほとんどだった。今回のように、『自身の悩みやうまくいかなかったことから、こんなことをやってみた』という発表は、あまりなかった」とのご意見をいただいた。

実際、私のはじめに作成した発表資料は、まさに前者の形だった。一度作成した資料を中森先生に見ていただいたところ、「教育観の変容や同僚との関係性、行き詰っていることやもやもやしているものを伝えると、皆さん共感されるのではないか」とのアドバイスをいただいた。話題提供の話をいただいた最初の段階でも、このようなことは教えていただいていた。また、これまでのカンファレンスや集中講座の中で、何度も、「教職大学院での学びはプロセスや自身の思いを物語ることが大切だ」と言われ

てきた。しかし、自分の実践をいざ人に報告するとなると、やはりどうしても、実践したことの内容や方法を分かりやすく紹介しよう、説明しようとしてしまう。

よくよく考えてみると、教職大学院で学ぶ方々はさまざまな職種・校種・立場・年齢の人たちがいて、それぞれがすでに立派な実践を持っている。そのような場で本校の研修会の様子だけを事細かに説明しても、その先の学びに広がりには生まれないのだろう。それよりも、聞き手の共感を得るとは、どのようなことだろうか。物語るとは、何を伝えることなのだろうか。そこで、改めていただいたアドバイスをもとに自分の思いを書き出し、人に聞いてもらいたいことは何かを考えてみた。たくさんの人に聞いてもらいたいモヤモヤは何か。私の気持ちは、どんなふうに揺れ動いてきたのか。うまくいなくて困っていることは何だろうか。

- ・昨年度は、何も取り組めなかったという思い
- ・カンファレンスでの気付きから、校内研修会を開催できたこと
- ・問題行動対応に追われる多忙な毎日・疲労
- ・意識調査・質問紙調査の結果から考えたこと
- ・自分自身の焦りや苛立ち
- ・同僚の先生や夏期集中講座で話すことで、冷静になったこと

このような思いを少しでも盛り込めたらと考え、資料を再考し、そして発表させていただいた。学びや気付きを言語化するのは、なんと難しいことか。長期実践報告を書くとはこういうことなのか。なんとなく避けてきた現実が、ふと目の前をよぎった。日常の授業、行事に向けた準備、学年や生徒指導上の業務、加えて学期末。正直、発表の準備をするのは大変だった。しかし、得るものは大きかった。

お忙しい中ご指導くださり見守ってくださった
中森先生、話題提供すると知って励ましてくださっ

た先輩の先生方、そして、当日の発表を温かく聞いて
くださった皆さん、ありがとうございました。

立ち止まって見えた景色

学校改革マネジメントコース1年/立命館宇治中学校・高等学校

酒井 淳平

もう入学して半年以上たったのか。これが今の率直な感想です。「大学院生になってどう?」「どんなこと研究してるの?」「修了したらどうするの?」。職場ではよく聞かれるこうした問いに、果たして1年後どんなふうに答えられるのだろうかと考え、今から少し緊張もします。

大学院進学にあたっては、校長からミッションをもらう形となりました。そのため今年度は業務軽減をしてもらっています。数学や探究の授業は担当し、分掌部員ではあるものの、分掌部長や学年主任でもなく、担任もしていません。教員生活の中で初めての経験です。当初はもっと余裕のある生活ができると思っていたのですが、いろんなところに訪問したり、来客対応などしていると意外とあわただしい毎日です。ただ、その分、学校を「外側から」見つめなおす視点が得られたようにも感じています。長らく学年主任や分掌部長をされていた再任用の先生から「酒井くんは先にその経験ができていいなあ。再任用で担任を持たないと何をすべきかわからなくなるよ」と言われたりもしました。その言葉に今自分がいただいている貴重な時間を実感します。

今年度は、管理職と相談しながら、職場の先生方へのヒアリングを行い、その結果を管理職にプレゼンするということをしました。また立命館系列以外の高校にも声をかけて「起業キャンプ(3泊4日)」の実施、校内の授業改善チームの発展を探る取り組み、FC 今治里山校や米子北高校との交流会なども担当しました。青翔開智高校への見学、飯野高校や島根県教育委員会主催の教員研修参加など他校とつながる機

会も増えました。上対馬高校への訪問は移動だけでも1日かかりでしたが、分掌部長や学年主任などをしていたら、実現していなかったと思います。初年次教育学会にも参加し、今までと違う方に出会うこともできました。このような機会に感謝しつつ、もし大学院生になってなかったら、こうしたことはできていただろうかと思ったりもします。大学院でともに学ぶ福井県の先生方は、通常業務をしながら通学されていて、その志には尊敬しかありません。そうした先生方だからこそ、少しでも業務を軽減できる環境や制度があれば、最終的には福井県の教育の質を高めることにつながるのではないかと思ったりもします。これは自分の職場にも言えることです。自分がこの2年間の学びをしっかりと職場に還元することが業務軽減の意味に見える化し、それが後輩たちにも還元されます。未来に少しでも良い影響を残せるように努めたいと思います。

部長や主任でなくなったため、校内では運営委員会に参加することがなくなりました。教員会議には参加していますが、オンラインで聞いているだけです。提案などしなくていい気持ちはありますが、学校の動きが全く分からなくなったのも事実です。管理職と話す機会がそれなりにある自分でもこう感じるのだから、他の先生方はどうなんだろう。そんな問いが校内の課題を別の角度から浮かび上がらせました。

「みんなで学校(教育)を作る」。よく言われる言葉ですが当事者意識がなければ、その理念は空回りします。当事者性を失ったとき、上から降りてくる仕事は「やらされるもの」で、できれば関わりたくない、

あるいは無難にこなすだけのものになります。対話や授業改善の取り組みは、教員が教育を語り合い、仲間を得て「自ら学校をつくっている」という感覚を育む意味もあると思います。かつては飲み会がその機能を果たしていた面があるのかもしれませんが、その文化が排除していた先生方も存在したでしょう。

「令和の飲み会とは何か」そんなテーマも頭の片隅に置きたいと思っています。

そして「当事者意識」という言葉は、実はもっと大きな文脈にも当てはまるのではないのでしょうか。学習指導要領の改訂が、学校現場にどれほど当事者性をもって受け止められるか。これが今後の教育を左右する鍵になると思います。私事ですが、中央教育審議会の生活総合ワーキングに参加させていただくことになりました。現場の声を届けることが自分の使命だと思い、少しでも多くの学校がよりよい教育を探究できるような学習指導要領になるために、自分にできることを探し続けたいと思います。

笑顔で子供たちと向き合えるように「整える」

学校改革マネジメントコース2年/岐阜市立市橋小学校

加藤 敦子

昨年度は研修主事として、「コミュニティ」をキーワードに、研修の在り方を追究し続けた。

今年度は教務主任として、「整える」をキーワードに、笑顔で子供たちと向き合える教員集団を目指し、自分の役割について問い、追究し続けている。

昨年度までは、主体的に学ぶ教員集団を目指したいと願い、「どうしたら主体的に研修会に参加していただけるだろう?」「どうすると価値ある研修会になるのだろう?」そして、「今後、先生たちが自己のキャリアステージに応じた研修を自ら選んで取り組んでいけるようになるためには、どのような工夫ができるだろうか?」などを考えながら実践を重ねた。ところが、今年度から、この役割を担うことになり、見方・考え方が少し変わった。きっかけは、5月の月間合同カンファレンスでファシリテーターをくださった 清川メッキ工業株式会社 清川 卓二先生のお話だった。「ビジネスにおいて、お客様は大切だけど、まずは社員が元気で働いてくれないとねえ…」それを聞いて、全くその通りだと思った。振り返ると、これまで私は、同僚に「学ぶ」ように求め、「学ばなければならない」という思いを自然に押し付けてい

たかもしれない。確かに教員は学び続けなければならぬ。なぜなら私たちの仕事は、高度な専門職だからだ。しかし、それ以前に、教員は毎日笑顔で子供たちと向き合えるだけのエネルギーがなければ、もっている力を存分に発揮することはできない。つまり、よりよい学校生活を支えるのは「教員」であると気付いた私は、働きやすい、学びやすいと思えるように「整える（または調整する）」が役割だと分かった。

それからは、子供や教員の様子に気を配り、問題や課題を見付けて企画委員会（校長、教頭、教務主任、生徒指導で構成される会）の議題とし、共有・検討する時間を設定するようにした。今年度は次のような内容を議題に挙げ、検討されたことを実践している。

（１）教育課程を見直し、教員の校内研修の時間を確保する

部分休業制度を利用している教員は、6時間授業が終わってから研修を受けると勤務時間外になってしまう。そこで、教育課程を見直し、今年度から水曜日を5時間授業にした。それによって、6時間目の時間に部分休業の制度を利用している教員も研修を受けることができるようになった。

（２）勤務形態を把握し、安心して働ける環境を整える

部分休業制度を利用している教員と再任用短時間勤務の教員が複数名いる。昨年度までは、部分休業制度を利用している教員が出勤する２時間目まで、朝の会は生徒指導、１時間目の授業は再任用短時間勤務の教員が入って指導していた。しかし、再任用短時間勤務の教員は、スライド勤務ができると分かり、今年度から朝の会と１時間目の授業をお願いすることができた。教員の入れ替わりが少なくなり、学級の子供たちは、毎日落ち着いて一日のスタートを切ることができている。

（３）特別支援学級の時間割と介助員の働き方を把握し、子供たちの学びを保障する

今年度の特別支援学級数は４学級である。その内３学級は８名ずつ児童がいる。特別支援学級の児童は、交流学級で学習する時間もあるが、自学級で授業を受けることの方が多い。ひと学級の定員は８名までだが、個に応じた指導や支援は難しい。そこで、特

別支援学級に所属している全児童の時間割と介助員の働き方を整理し、特別支援学級の担任４名で協力して指導や支援ができるように教科担任制を組み、特別支援学級全体で子供たちを育ていくことにした。

これ以外にも「整える」ために、各指導部会からの提案内容について会議の前に指導部長と話したり、研修主事と研修会の内容や行い方について話し合ったりするなどしている。これら一つ一つを考える時には、いつも心のどこかで「子供たちだけでなく先生たちも笑顔でいられるようにするためには…」と自分自身に問いかけるようになった。

年度当初、視野が狭く、自分の役割がよく分からず戸惑っていた私の見方・考え方を広げるきっかけをつくってくださった清川先生に感謝申し上げる。自分がやっていることが本当によいかどうかは分かりづらいが、先生たちの笑顔のため、心配り・心配りを忘れることなく役割を果たし、笑顔あふれる市橋小学校になるよう努めたい。

焦らない学校改革をめざして

学校改革マネジメントコース２年/奈良女子大学附属小学校

河田 慎太郎

教職大学院での学びも２年目の後半を迎えている。私は、教員になってから私立小学校である近畿大学附属小学校に１４年、国立大学の附属である奈良女子大学附属小学校に１３年勤めた後で、教職大学院で勉強することをスタートした。一般的な公立小学校であれば長くても６年ほどで転勤となると聞いたので、私は非常に長い間同一校で学び続けることができた。

長い期間学び続ける良さは、勤務校の良さを実感し、マイナーチェンジを加えながらも学校の理念に沿ってより良い学びにしていけることができることで

あろう。よく言えば、筋の通った学びを継承していくことができたと思う。

ところで、私の唯一の転勤は、学校の理念が大きく違う学校であったため、非常に戸惑いがあった。難問といわれる問題をいかにして解いていくのかを考え、子どもたちに伝える教授法の学校から、一つの問題について子どもたち自身で考え、練り上げていく学習法の学校への転勤は、教師としての自分の頭の転換が大変だったことを思い出す。どちらの学校も理念が素晴らしく、それぞれの学校の考え方に合わせて教材研究を行ってきた。

そして、教職大学院で学び始めた昨年、配置転換によって奈良教育大学附属小学校で勤務することとなった。理念をしっかり持った学校であるが、個人的に納得のできない部分がいくらかあった。配置転換で行かせていただいたということは、ある程度自分の考えを述べてもよいのかと考えていたため、自分の考えを職員会議などで話す機会が増えた。

教職大学院で「学校改革マネジメントコース」に所属していたこともあり、学校を改革できることがあれば提案していきたくて考えていた。ありがたいことに、提案をする準備を進めている時に教職大学院の月間カンファレンスが行われることが多かった。カンファレンスでは、その日の学習材について学び話し合うことがほとんどである。オンラインで参加することが多かった私は、メンバー紹介の時などに、職員会議で提案したい内容を聞いていただく時間をとっていただいた。自分としては正しいと思っていた提案であっても、「その内容はすぐに変えるのは難しいと思います。徐々に提案しながら同じ考えの先生を増やしていくと良いと思いますよ」「その提案は、今すぐにでも実施するべきです。管理職や養護教諭に先に話しておいてすぐに対応すると良いですよ」など、たくさんのご意見を頂くことができた。おかげで独りよがりな意見や提案にならず、伝えることができた。

また、1年目の夏期集中カンファレンスで読んだ「学校づくりの記」と「コミュニティ・オブ・プラクティス」そして、それらの感想等の意見交換が非常に参考になった。斎藤喜博先生のように校長先生という立場ではないが、「学校づくりの記」からは、学校

は子どもたちが生き生きと生活できるように環境を整えていくこと、先生方が卑屈にならず自信をもって学校運営していくことが大切であることを学んだ。学校を改革していくことも重要であるが、担任としては、目の前の学級の子どもたちが育って聞くことを見守り、支えていくことが重要であると思い直すことができた。「コミュニティ・オブ・プラクティス」では、一匹狼にならず、仲間（コミュニティ）をつかって改革していくことの大切さを学んだ。何かを改革したいときは、同じ考えを持った人たちで意見をまとめて出し合い、考えを練り合っていくことが必要である。学校を改革しようと躍起になっていた自分にとって、教職大学院のカンファレンスで一緒になった先生方から意見を聞かせていただく余裕や、前任校の先生方に相談しながらじっくり改革を進めていくなど作戦を練ることができた。

そして今年度は、奈良教育大学附属小学校の勤務を1年で終えて、奈良女子大学附属小学校に戻り、主幹教諭として勤務することになった。学級担任ではなくなり、学校全体を視野に入れながらの仕事は、職種が代わってしまったような難しさがある。しかし、慣れない職種ではあるが、昨年までの経験が非常に生きていて感じている。学校を改革すると意気込みすぎるのではなく、本校の良さをいかしながら、教員集団と相談をしてより良い学校運営を進めていきたい。今年度も、ありがたいことに月間カンファレンス等で教職大学院の仲間からも意見を聞かせていただくこともできている。一人で悩まずに多くのコミュニティから意見をもらいながら学校改革を考えていきたい。

新学科づくりへの挑戦

学校改革マネジメントコース2年/福井県立若狭東高等学校

細川 和孝

新しい工業創造科が誕生し4月にスタートを切ってから7ヶ月が経った。振り返ると、まず4月当初の

年間時間割作成が新カリキュラムの実践を進める上での大きな山場であった。

本校では各学科（農業・工業・商業）、教科で科目のコマをつくり、条件でしぼりのきつい科目から、時間割にはめ込んでいく。これがうまくいかないと、スムーズなカリキュラム運営は実現しない。工業科主任として失敗は許されない。工業創造科として初めての時間割作成になるため、うまく組めるかを懸念していた。総合産業高校ならではの各学科特有の実習のしぼり（2時間・3時間連続・TT など）が多くあるので、学科の科目を先に入れていく。農工商それぞれの先生方が、条件を考慮してコマを入れていくのだが、今年度は工業科を先に入れさせてもらえるように教務主任にお願いをしていた。私の今年度の校務分掌は教務部であり、主担当業務の一つが年間時間割作成であったので、わがままを言いやすかったのもある。とにかく時間割がうまく組めないことには、新カリキュラムの運用は始まらないので「先に工業科を入れさせてください」と他学科の先生方にもお願いをしてコマを入れさせてもらった。その後、教務部の先生方を中心に三日間ほどかけて、全体の年間時間割を無事に完成させることができた。

時間割作成と並行して、工業創造科のクラス分け（二クラス）と2年次コース分け保護者説明会の準備も行っていた。工業科会議でそれらについても話し合った。

クラス分けでは、合格者を様々な条件（出身中学校・成績等）でバランスをとりながら二クラスに分けた。中高連絡会で若狭地域の各中学校から人間関係なども聞いていたので、それらについても配慮しながら私がクラス分けのたたき台をつくり、会議での話し合いで決めていった。工業創造科の先生方全員に「私たちの学科・学校」という意識、感覚をもってもらいたいという思いがあり、新学科のどんなこともみんなで話し合うように心がけた。

新カリキュラムの中核である1年生の探究（課題研究）も進んでいる。すでに作成してある3年間分のシラバスを軸に、先生方と話し合い詳細を詰めながら日々実践を進めている。最初に中、高の探究のつながりを意識させようと、中学生の時に探究で行った活動を各自がまとめた。次に過去の本校工業科3年

生が課題研究で取り組んできたプレゼンテーション資料を見て、どのような専門の探究をしてきたのか、今の学習が今後どうつながっていくのかという3年間の見通しが立てられるように考える時間をとった。

また、安全学習にもじっくりと時間をとった。工業の実習で最も重要なのが、生徒の安全への意識醸成である。鋭利な工具や大きな工作機械、危険な電気機器を扱うため、事故を防ぐための心構えを徹底して身につける必要がある。従って、安全教育を第一に行い、その上で実際に機械工場や電気実習室の現場にタブレットをもって移動し、どこに危険が潜んでいるかを写真に撮り、どうすれば危険を回避できるのかを考え、ドキュメントを作成することにした。生徒たちは友達と話し合いながら、工場や実習室で危険箇所の写真を撮り、リスク回避についてまとめた。

次にまとめたものをカンファレンスのような形でグループ発表をすることにし、発表が終わるごとにグループ内で対話をする時間をとった。グループ探究で他者目線の危険箇所を知り、それらを共有することと、安全に対する仲間の意見を聞くことで深い安全意識が醸成できるのではと考えた。

私が担当するクラスの発表と対話は、うまくいくグループとそうでないグループに分かれた。うまくいくグループは、それぞれの発表を傾聴する姿勢があり、自分の考えと一致している部分や違う部分を見出し、対話から異なる視点を得て学び合いができていた。一方、うまく話し合えないグループでは傾聴の姿勢が薄く、対話が成立せずに不十分なまま終わってしまった。そもそもこちらの提示した内容やテーマ設定が対話に適していなかったのではないかと反省した。

安全教育が終わり、現在は基本的な機械部品を調べる個人探究に入っている。機械のねじ、ボルトナット、釘の中から二つ題材を選び、それらの材料や種類、大きさや値段、用途や製造している企業などを調べ書き出していく。それをもとに周りとは相談しながらタブレットでスライドにまとめ、今度はグループではなく一人ひとりがクラス全体に向けて発表する形にした。対話の時間はとらなかったが、思考に深みの

ある発表を聞くことができた。すでに中学校でスライドのつくり方や発表などを経験していることが分かる内容でもあった。次は、電気・電子部品で同じようにまとめ、発表が始まる段階である。

こうして新しい学科づくりと新カリキュラム実践への挑戦の日々を送っている。教職大学院での学びを生かし、工業科の先生方と日々対話を重ねながら

協働で実践を積み上げているところである。うまくいかなかったと反省することもあるが、教職大学院での同志との学びが、私や学科という実践コミュニティの支えとなっている。これからも先生方からいただく課題解決や改善のヒント、助言、ひらめきを実践の中に取り入れながら、本校教職員との対話を重ね、生徒たちの深い学びと成長を支えていきたい。



インターンシップ/金曜カンファレンス報告

インターンの半年間の変化

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

三輪 佑輔

気が付けばもう10月が過ぎていた。私自身まだまだインターンに慣れていないが、その中で自分の立ち位置が少しずつ分かった気がしていた。振り返り考えていくと、様々なイベントがあった。最近は、特にインターンに行くことが楽しいとも感じられることが増えた。あることから少しずつ変わっていったと思われる。

あることとは2つあり、1つ目はクラスの文化祭・体育祭であった。4月から附属義務教育学校後期課程の9年生でインターンをしている。最初は何をしているのか、どう決めていくのか等、何が行われているのかの状況を見るだけであった。演劇の台本決めでも意見がぶつかると、お互い自分の意見を如何に通すかを考えていたようだった。しかし、何日か後には前回まで自分の意見を通すことを第一にしていたクラスが、自分たちのクラスの特色、その演劇のどの部分が自分たちにプラスになるのか等、自分事に考えてディベート方式で決め合っていた。これには、私もとても驚いた。加えて、これは生徒だけで行っており、教員は見守る側であることから、自然と自分事に捉えられていた。

役割やセリフ決め、小道具づくりなど始まった。特に、私は照明のグループ班と小道具作りを中心に見ていた。最初、照明班は照明のつけ方など行っていたが、台本やどこに当てるか等細かく決まっていなかったため、だれてしまう時期もあった。そうしていき、気づけば秋9月になった。ここで台本のセリフを大きく変えることが決まった。否定する声も

出たが、自分事の次に、協働を自然に身に付けており、大変だけど皆で頑張ろうという声が多く出た。

文化祭前日・当日では、演劇の時間が課題になっていた。それまで通してなかったのもあり、時間がオーバーしてしまう。それでも自分たちでどこを工夫したら、できるのかそれぞれでなく、全員で出し合って考えていた。本番では、大成功したと言える。これまで社創の演劇における感動や過程から、生徒が大きく成長できるものということを身に染みて学んだ。また、終えてからは、クラスが明るくなり、朝教室に入ると、私が挨拶する前に生徒から挨拶してくれることが増えた。そのため、最近教室に行くことが楽しいと4月、6月の気持ちと比べて変化した。

2つ目は勉強や学びを一緒にしたことであった。最近特にわからない問題や授業での疑問を聞くことが増えた。9年生なので、特に学習に不安定な時期である。春は一度持ち帰ったり、すぐに答えを正しく伝えたりしていた。ある時、いつも通りに質問に答えていたら、その後の生徒の顔やあまり明るくなかった。私はやらかしていたことに数日経って気づいた。ここは塾ではない。そのため答えを教えてほしいよりも、一緒に悩んでほしい、考え方や意見をお互い共有したいのではないかと考えた。これでは協働でもない、学びのチャンスを活かしていないと考えたようになった。最近、手法を増やした。いきなり回答や考えを聞くのではなく、少し雑談を加えてリラックスした状態で始め、質問も考えや答え、解

く過程のどこが欲しいのか考えてから、生徒にも聞くようにしている。

私は生徒に寄り添い、一緒に進んでいきたいと考えている。自分のこれまでの経験が大きく影響しているためである。9月くらいの自分は、大変そうだ、2回授業したけどあまりしたくない、生徒にどう思われているのか等、自分中心に考えていたので、インターンもあまり慣れなかったと感じた。今は、自分の中でその軸をきちんと持ち、そのために生徒に何ができるのだろうと考えて行動している。とある

先生からある言葉を頂いた。生徒に人気で好印象な先生よりも生徒から頼られる先生になってほしい。私はこの言葉がとて残っており、春までの自分の行動や考え等が頼られるとは程遠かった。もう10月も過ぎて、今のクラスとも過ごす時間が限られてきた。これからは、自分が利他的に、本当の意味での生徒に寄り添えるように励みたいと思う。社創に興味があるので、7、8年生の社創にも参加して、その時点での生徒の様子等を見ておきたいと思う。カンファレンスなどで他の方の話も自分に何か繋がりを意識したい。

つながり

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

青木 駿太

大学院に入学し半年が経過し、学校も後期に入った。現在、福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程の5年生でインターン生として、また非常勤講師として学ばせていただいている。前期では、子どもたちの興味・関心や変化を見取ることを中心にして、メンターの先生をはじめ、様々な学年・教科の授業を見せていただいた。その中で印象に残ったことは、9年生（中学校3年生）の姿を見据えることと、学校で学ぶ意義である。大学院の金曜カンファレンス（以下金カン）でも、なぜ学校に行かなければならないのかについて考えてきた。インターン先での子どもたちの姿と、様々な校種・教科の学生と対話を重ねることで、今まで自分が見てきた子どもたちの姿だけではなく、見えていなかった部分に対話によって考えるきっかけになったと感じている。前期を通じて、答えの無い問いに対してアプローチを重ね、自分なりの考えをもつことの重要性を学んだ。後期でも引き続き、学校で学ぶ意義や子どもたちの姿を見取ることを中心にインターンを行っていききたい。

前期での見取りや学びを踏まえ、後期では「つながり」を自身のテーマとしてインターンや授業を行っている。ここでのつながりとは、子ども同士の人間関係的な「つながり」や教科や学年間の「つながり」、学習の中での思考の「つながり」などがある。つながりをテーマにしようと思ったきっかけは、授業での子どもたちの様子からである。『グループやクラスの他の人と考えたことで分かったことや考えが深まった』『4年生で学習したことを使ったら、新しいことが分かった』など他の人とのつながりや教科内でのつながりが、探究的な学びのために必要であると感じた。前期の金カンでは学校で学ぶ意義を考え、他者との繋がりや協働に注目していた。後期のはじめは子どもたち同士のつながりと学習内容のつながりに焦点を当てて見取りを行っている。

後期（11月）は、他校の研究から学び、他校の研究を支えるがテーマになっている。金カンでも至民中学校の公開研究発表会に参加し、安居中学校の公開研究会にも参加予定である。また、前期課程では、インターン生の所属学年をシャッフルし、他学年の子どもたちの様子や学びを見取るインターンシャ

ッフルが行われた。私はインター先が3年生に変わり、中学年での子どもたちの学びを見取った。他校や他学年を見るなかで、子どもたちの実態や発達段階に応じたつながりが印象に残った。地域や学校行事での課題点から考えを深めたり、分からない部分を他者に尋ねに行ったりする姿があった。特に、3年生での子どもたちの学び方が印象的だった。はじめ、多くの子どもたちは課題に対して一人で黙々と考え、教科書や資料に没頭する姿があった。課題に対して答えをもったり、分からない部分があったりする子どもたちは次第に他の人の所に行き、意見を交換する姿が見られた。同じ意見を調べている人の所に行ったり、全く異なる意見を持っている人の所に行ったりと学び方はその子どもたちに委ねられていた。この子どもたちの姿を見て、他者と考える

る必要があるからこそ子どもたちは協働的に学び、深めていくと考えた。協働探究では、個人で深く学んだ経験があるからこそ、他者と考えることのよさを実感し、他者と一緒に考えることで自身の中でより深く学ぶことにつながると考える。3年生での学び方が5年生での他者と共に学ぶ学び方につながっていると思った。子どもたちの9年生の姿を見据えた3年生での学び方だった。自身の授業や見取りの中で、9年生や次の学年での子どもたちの姿をイメージできていない部分が多い。本年度も半分を過ぎ、改めて9年生へとつながる学びや姿を見取り、授業等に活かしていきたいと思う。そして、「つながり」をテーマに、協働探究について学びを深めていきたい。

人と関わるということ、幸せということ

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

藤岡 真子

今年度の初め、正確に言うと昨年度の終わり、私は葛藤の真っ最中にいた。

来年からのインター先を変えようか、変えないでおこうか・・・。

もう1年を5年生の子どもたちと共に過ごそうか、それとも教職大学院に進学したからこそ得られた附属義務教育学校での学ぶ機会を選ぼうか、私は決めかねていた。5年生の子どもたちの小学校最後の1年を見守りたい、2年間しかない大学院生活だからこそ附属での新たな経験もしたい。そんな思いが私の中で渦巻く中、先生方や先輩方との相談を得て、私は最終的に1年間過ごしたインター先と子どもたちに別れを告げた。

この選択に後悔はしていない。しかし、附属でのインターンの半年間、捨てきれない欲は私についてまわった。去年の子どもたちの姿をもう1年見守り

たかったという欲が。それはこの半年間の附属でのインターンが充実すればするほど膨らんでいった。

同じように今給食を食べているのかなあ。もうすぐ体育大会だなあ、誰が団長になったんだろう、あの子かなあ・・・。ああどちらの学校にもインターンに行きたいな、行けないのかなあ・・・。

彼らは何に笑い、何に心を揺さぶられ、何を考えているのだろうか。附属での子どもたちの豊かな心に触れるたびにその欲は、その思いは大きくなるばかりだった。

そのような欲深い私に神様は痺れを切らしたのかもしれない。ひょんなことから去年のインターの先で授業を見せていただく機会を得ることができた。訪問の日付が決まった日から、指折りその訪問の日を待つ日々が始まった。そうして待ちに待った訪問の日。授業と授業の間の数分の休み時間、彼ら

の新しい6年生の教室へと足を運んだ。子どもたちはどんな反応するのだろう、大きくなっているかな、私を覚えてくれているかしら、とそんなことを頭の中で考えながら、去年1年間浸りに浸りまくったその学校の雰囲気自分に自分を馴染ませよう長い廊下を歩いた。すると見覚えのある顔が見えた。その子は去年のお別れの時、「じゃあねー、先生ー」と軽い挨拶をして帰っていった子どもだった。彼女はどちらかというと顔に表情が出るタイプではなく、大人な雰囲気をまとった子どもでもあった。だからこそ、え、先生じゃん、なんているん？と飄々とした顔で話しかけてきそうだなと思っていた。しかし彼女の反応は予想を大きく上回るものだった。

「え！？藤岡先生！！なんで？！」

私を認識した彼女は、目玉がこぼれ落ちそうになるくらい目を大きくさせ言葉をこぼした。そして私の存在を確かめるように、両手を出して私の手を握ってきた。私が存在していると確信したのか、みるみるうちに彼女の顔は笑顔に染まっていった。

ここまで顔に、声に、行動に感情が出ている彼女をみるのは初めてだった。私は初めて見た彼女の姿に困惑しながら彼女に引っ張られるように去年の子どもたちの新しい教室へと入っていった。

「みんな！藤岡先生おる！」

「え！なんで？」

「ほんとや！」

「先生なんでおるん？」

「先生だ！本当に先生だ！」

「先生ここの学校に決まったの？」

「先生私のこと覚えてる？」

「先生、明日も来るの？来るよね？」

たくさんの言葉が私に届いた。たくさんの笑顔が見えた。たくさんの手が私に触れてきた。去年1番向き合った子どもと目が合った。「元気にしてた？」と彼に声をかけると照れながら私の目を見てくれた。そして私の横で体をピッタリとくっつけて私が

他の子どもたちと会話するのを見守ってくれていた。

彼らの言葉、表情、行動、そして触れてくる手や体温からは私との再会への喜びを感じた。視線が私より高くなった子どもたち、知っているようで知らない子どもの姿から彼らが前に進んでいるのだと、彼らの成長を感じた。

「この3年間は、卒業式の子どもたちをみるために頑張ってきたんだと思った」

「子どものあの笑顔を見ることで全てがチャラになる」

多くの先生方がそのように語る姿を見てきた。でも私にはその感覚はわからなかった。わからなかったというよりも想像はできるけれど実感はしたことがないといった方適切だろう。でも先生方の語るものはこういうことなのかもしれないとその時感じた。

うれしいような、悲しく寂しいような、でも満たされていて。そして愛おしくて。そんな感情を私は抱いた。自然と目頭が熱くなった。

それは半年彼らと離れたからこそ得られたもの、感じる事ができたものだった。人と関わるということ、幸せということだと知った。

毎週行われる金曜カンファレンス（以下金カン）の3の時間でもそれを感じた。

私は190号のニュースレターでこのように語っている。

「大学院生にもなって、こんなに心がぐちゃぐちゃにされると思わなかった。」

これが素直な私の金曜カンファレンス3の時間の感想である。

（ニュースレター190号より）

ここに語られている言葉は、私にとって3の時間がネガティブなものとしてのしかかっていることを意味していた。常に気を張り同期の言葉の背景に神経を集中させ、その言葉を翻訳する。体のエネルギーの大半を使っていた。そのような3の時間だっ

た。でもその積み重ねやかけた時間によって3の時間は形を変えていった。一人一人が安心して必要とされ、でも真剣に言いたいことは言う、そういう時間となっていった。人と人との思考の間をフラフラと歩き回っていた私は、今ではいい意味で何もしていない。何もしていないが、そこでは同期の良さが滲み出て、絵の具のように交わり、笑いが溢れてい

る。うれしいような、悲しく寂しいような、でも満たされていて。そして愛おしいそんな時間に今なっている。

“人と関わるということ、幸せということ”、その意味が私の中で少しずつ輪郭を描き始めている。

インターンシップでの気付き

授業研究・教職専門性開発コース2年/岐阜市立柳津小学校

都筑 智也

私は現在、岐阜市立柳津小学校でインターンシップを行っている。今回は日々のインターンシップでの学びや気付きについて紹介していきたい。

元々は生活科という教科の理解を深めるためにインターンシップを行っていたが、今では幼児教育から小学校への円滑な接続の方法を探るという視点でインターンシップを行っている。去年から現在にかけて、様々な教科の授業実践もさせていただいている。その中での学びや気付きについて述べる。

まず、インターンシップ中に1年生の子どもたちを観察していて、一番強く感じたことは、1年生にとって45分の授業をずっと集中して受けることがとても難しいのではないのかということである。小学校という新しい環境に対する不慣れやそれぞれの児童の発達段階などにもよると思うが、椅子にずっと座るのが難しい児童、筆箱などをずっと触ってしまい話を聞くのが難しい児童、ノートをとるのが難しい児童などが想像よりも多かった。そんな彼らが集中して学習に取り組めるためにはどうすればよいのかと考えることが多くなり、授業の構成を考える際もそのことを一番に考慮するようになった。

そのような考えをもった上で、国語の授業実践を行った。実践した単元は濁音や半濁音について学習する内容である。この単元は、字を書いたり読んだ

りする上でとても重要な内容であるため、じっくりと行いたいという気持ちがあったが、そのような中でも楽しみながら学べるように、濁音や促音のついた言葉を聞き出し、その言葉を使って一緒に替え歌をつくる活動を行った。この活動を行った瞬間、「次はこの言葉でやりたい」「こんな言葉もある」など進んで活動にのめり込んでいく姿が見られた。この活動を行ったことで、教師からの一方的な教え込みではなく、子どもたちが遊び感覚で楽しめる活動をさせることの大切さを知ることができた。

次に算数の授業実践を行った。実践した単元は色々な形の特徴について学習する内容である。単元の始めでは自分たちが持ってきた空箱を使って、色々なものを作る授業を行った。その活動中や後の発表の中では、タワーを高くするために箱の向きを工夫すること、階段を作るために箱の置き方を工夫することなどかたちの特徴に着目しながら活動することができていた。しかし、次の授業でも「前回の続きをやりたい」「もっとやりたかった」という声が多く次の内容に進むことが難しかった。遊び感覚で子どもたちが学ぶことができるのは良いことだが、それが子どもたちにとってただの遊びになってしまうと本来の学習の目的から外れてしまうことを、身をもって感じた。

色々な授業実践を通して、授業の中で遊びから学びへ繋げていくことの大切さと難しさを感じる事ができた。1年生という発達段階において、これからの学習の基礎を築くことはもちろん、人との関

わり方などを学ぶことはとても重要なことであると考えている。残りのインターンシップで、少しでもその力になれるように観察や実践を行い、将来の活動で生かしていけるようにしたい。

子どもは成長、自分自身は…

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

桑原 里沙

インターン生として附属前期に入って3年目、今年は1年生のクラスを担当している。なんと教育実習を含めて低学年を担当することは初めてである。ドキドキワクワクで始まった4月。そこから半年以上が経ち、11月10日時点で登校日が残り84日しかないらしい（副校長より）。非常勤講師として授業をしている中で、インターンとしては学級ができていく過程とともに、子どもたち1人1人の変化を見取っている。その中でも半年間気にかけてきたある子どもの変化をここに記していく。

子どもたちが入学してきた4月当初、学級内では新しい友達をつくらうとしている子どもがたくさん見られた。しかし、学校という慣れない環境であったからか、数人は「お腹がいたい」「保健室に行きたい」と訴えてきていた。1、2か月を過ぎたところでそんなこともなくなり、学級の友達と過ごそうという気持ちがあらわれていた。学級の中には、自分から上手く話しかけられないこともあり、教員としか距離を詰めることができなかった子がいた。この子が半年間気にかけていた子どもである。とりあえず私や担任が関わりながらも少しずつ同じ学級の子と話せるようにしていこうとしていた。しかし、すぐに話せるようになるはずもなく、1、2か月経っても教員とのコミュニケーションばかりであった。その子の転機となったと思われるのは係活動である。やりたい係を自分で選択して行うのだが、その子はやるべきときに気づいてすぐに係活動に取り組み、他にないかを担任に聞いているときもあ

る。そんな様子を見て私は毎回のようになめたり感謝したりしていた。自分のことだけでなく、他者のことも考えられるようになり責任感が増したことに気がついた。教員がその子に係活動について褒めていくことによって自信がついてきて授業中に発言をすることがいつの間にか増えていた。友達との関係についても席替えを通じて少しずつではあるが、半年経った今、コミュニケーションをとることができるようになっていく。

さて、半年の中で子どもの成長や変化を感じることができていたのだが、私自身が変化した部分はあったのだろうか。そう考えるとあまり変化がなかったのではないかな。インターン生として日々子どもたちのことを見取っている。半年間、学級全体を見取りながら1人1人に対する支援も考えている。子どもの成長に合わせて支援の仕方を変えるように意識しているのだが、特に何が変わっているのかは理解できていない。今思えば昨年までの2年間も自分に対する変化に注目することがなかった。他者に注目するがあまり、自分のことを後回しにしてしまう。これからの半年間は自分の変化にも気づくことができるようになりたい。

最後に、残りの半年間はインターン生としても院生としても何かしら変化できるようにしていきたい。インターン生としては先程記した、自分の変化にも注目していくということに加えて、子どもの支援についても自分なりの方法を定着させていきたい。

い。院生としては、毎週ある週間カンファレンス（以下金カン）でもっと自分の考えを出していきたい。これまでの半年間、M3としての参加の仕方がつかめていなかった。M3として自分が出るタイミングを見て参加していた。ただ、これからの金カンでは、M1

と同じ学び手が重きの立場として、自分の考えは話したいときに話していけるようにしたい。それが私にとって何かしら変化の材料となっていくのかもしれない。



月間合同カンファレンス（10月）等 報告

世代を超えて学び合い、過ごしやすい学校づくり

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市安居中学校

多田 和生

学校はどのように形成されているものなのだろうか。様々な個性を持った児童・生徒が存在し、あらゆる考え方や見方が出来る教員がいる。そのような人々によって形成されている学校はどのようにすれば全ての人々にとって過ごしやすい環境になるのだろうか。

私は過ごしやすい環境とは、どのようなものであるかと考えたときに真っ先に思い描くのは、生徒一人一人が個性を発揮し学校という場所が安心して過ごすことのできる場所だと考える。そのためには、まず教員全員が生徒一人一人の個性について把握しておくということが重要だと考える。しかし、教員全員が個人で一人一人の生徒の個性を把握することは難しく、また、個人の主観による生徒の見取りというものは隠れた生徒の個性に気づくことは出来ない。だからこそ、現在「チーム学校」という言葉があるように教員同士やカウンセラーなどが互いに協力して生徒一人一人の情報を共有して個人としての教師としてではなく、「チーム学校」と

しての教師として生徒一人一人に接することが重要だと考えられるのである。

ただ、「チーム学校」として取り組む中でも課題がある。それは、教員同士の連携をどのように取っていくかという問題である。互いが学校の業務で多忙な中で生徒についての情報を共有することは難しく、そもそも教員同士も互いのことが十分に理解出来ない。そこで問題が起こる要因に対する取り組みとして、ある学校においては職員室の教員用の座席を固定化せず毎日違う席に座るという取り組みを行っているという話があった。その取り組みは、基本的に学年ごとの担当ごと、あるいは、教科や業務ごとに配置してある座席を取り払うことで、教科や学年、業務を越えた教員同士のつながりを作るきっかけにするためにこのような試みをしているのだそうだ。また、他の取り組みとして、研究会での教員同士の交流について紹介したい。私が行っている安居中学校は、生徒数が少ないというような問題もあり、そもそも教員数が少ない学校となっている。

しかし、その少なさが研究会では大きな利点となっている。安居中学校の研究会では、ある特定の教科の研究をする際には、他教科の教員がその教科の授業構成が学校の教育方針にどれほど適しているか、その条件を満たせているかについて議論することが多い。つまりは、教員全体が学校の教育方針を十分に理解し、実践していく必要があるのである。また、この研究会では他教科の指導案で生徒観を知るきっかけにもなり、その授業では生徒がどのように学んでいるかを教員全体が共有でき、全ての教員が授業での生徒の様子、生活面の生徒の様子を把握するきっかけにもなっているのである。このような研究会が行えることは、生徒が学校生活のどの授業を通して思考判断の道筋を描きやすく、また教員同士が生徒の「個性」について十分に共有できているからこそ、生徒が学校で過ごしやすい環境となっている要因になっていると考えられるのである。何より、この研究会での素晴らしい点は、教員同士がどのような思考をしていてどのように生徒と接しているかが互いに理解できる機会が設けられている点だと考えられる。校長、教頭、学年主任、各教

科の教員が互いに理解を示し合わせる、そうしようとする取り組みこそが「チーム学校」として生徒と関わろうとする取り組みそのものなのだと思う。

今回の合同カンファレンスでは、学校がどのようにすれば生徒だけではなく教員も含めすべての学校関係者が学び合い、過ごしやすい学校になるかについて話すことが出来た。私は、授業研究・教職専門性開発コースの大学院生であり、また、未だにインターンに行くのみで実際の学校現場に深くかわり、知ることが出来ていないと日々感じていた。しかし、今回の合同カンファレンスを踏まえ、現在のインターン先である安居中学校の取り組みを振り返りを通して、少しだけだが自分自身も、より誰もが学び合い、過ごしやすい学校づくりについて考えてみたくなった。また、学校づくりは周りとの協力も必要だが、そもそもとして個人の意識が第一に重要である。だから私が出来ることとして、今回の合同カンファレンスを踏まえ、まずは、明日の自分の意識や行動を変えることが重要であり、そうしてこれからのインターンを過ごそうと思う。

見えてきた課題

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立羽水高等学校

谷口 裕都

10月の月間カンファレンスでは、自身のこれまでの実践の取り組みについて語った。実践といってもまだ数えるほどしか授業を行っていないため、まだまだ実践経験に乏しいが、私がこれまで行ってきた授業の一部と4月からの半年間のインターンを通して見えてきた課題点を中心に話した。

まず、異教科間の繋がりについて考えた。市橋小では、研究授業を行うにも一つの教科の先生のみで考えるのではなく、様々な教科の先生の意見を取り入れて授業設計をしていることがわかった。私の専門教科は数学だが、数学の授業を考える際、他の教

科の先生の視点が入ると新たな角度で授業案を考えることができる。他の教科の視点が入ると、数学に苦手なイメージをもっている生徒でも抵抗なく授業に取り組むことができるかもしれない。では、実情はどうなっているか。小、中、高と学年が上がって行くにつれて異教科間の繋がりには薄れていくのが現状だと考える。実際、インターン先で普段の先生方の様子を観察していると、教科間の先生同士での授業相談等のやり取りは頻繁に行われているが、異教科間でのやり取りはあまり行われていない。これは、羽水高校特有の問題ではないと思う。教科

の専門性が上がっていくにつれて、どうしてもそれぞれの教科の先生の間での結びつきが強くなっていくのは仕方のないことかもしれない。しかし、現代の複雑な社会情勢を踏まえると、特定の教科だけの理解だけでなく、他の分野との知識の統合が必要になっているため、教科の専門性が上がるにつれてむしろ異教科間の結びつきが必要になってくるだろう。そう考えると、現在のインターンという期間は、異教科間の結びつきを学ぶには非常に貴重な時間である。羽水高校では、定期的に公開授業週間が設けられており、数学以外の教科の先生方から学ばせていただくことも多い。授業においても「教科横断型」というワードが重要視されているように、複数の教科を関連付けながら授業を構成していくことが必要である。自分のこれまでの実践を振り返ってみると、教科横断型の実践はあまりできていない。意識は毎回しているが、教科の内容を教えることに目一杯でそこまでの余裕もないし、技量もない。これからさらに授業実践をしていくにあたって教科横断型を意識して取り組んでいきたい。

次に、これまでのインターンを通して見えてきた数学の授業における課題について述べる。それは、数学の概念的な理解にいたっていないことだ。公式、解法の紹介が授業の主眼に置かれる傾向が強いため、生徒たちの間にも数学は暗記科目だという意識が強いように思われる。例えば、等差数列の和を公式として捉えているため、項数が変わってくると対応できなかったり、習った直後やテスト前には公式

として覚えていても数か月後にはすっかり忘れてしまったりという生徒が見られた。もちろんそのまま覚えなければならない公式も存在するが、公式の成り立ちや公式の有用性を生徒自身が理解していればこれらのような事態は起こりにくいはずだ。また、概念的な理解をしていれば、たとえ単元が変わったとしてもそれまでの既習事項と関連付けながら考えることもできる。例えば、指数関数の最大値、最小値を求めるという問題に初めて出会ったとしても、概念的な理解をしていれば、二次関数の最大値、最小値問題に帰着させればいいことを自然に理解して解くことができる。そうすれば数学が単元として切れるのでなく、繋がりを持った領域として捉えられるようになり、学ぶ意義を見つけられる。数学を学ぶ意義を感じられない生徒は多いだろう。概念的な理解を促して生徒に数学を学ぶ意義を感じてもらえるような授業実践を考えていきたい。また、日常生活との関連を見いだせたときにも学ぶ意義を感じられる。日常生活において数学の考え方が用いられている場面を具体的に提示することで、抽象的な議論にとっつきやすくなるし、数学を身近に感じやすくなる。具体と抽象の往還が重要だと言われているが、数学においてこの考え方は特に重要だと思う。

他にも多くの課題を見つけたが、これらの課題を一度に解決しようとするのは困難である。これから実践、省察を繰り返して一つずつ課題に向き合っていきたい。

子どもの声を聞くこと～10 月カンファレンスを振り返り～

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

島田 涼真

子どもたちの「声」を聞くことの難しさ、それを常に実感している。授業中の見とりのなかでの声、子どもの考えが変わった時の声、授業外での声、あるいは訴え。私たち院生は、常にその声から学び

を受けている。ゆえに、見とりでもなんでも彼らの声から推察をしなければならない。そこになんの意図があったのか、どんな思いがあったのか。

附属義務教育学校で校外学習があった。それは通常想像されるものではなく、社会創生プロジェクトという活動の中で行われた取り組みだ。子どもたちが環境の美化について考えるため、区内を回ってみることにしたのだ。私はそこに同伴した。最初大人しめの女の子があまり積極的ではない様子でゴミ拾いをしていたのだが、街の様子を見ていく中で、みんなと活動していく中で何か変化があったのだろう。最後には「楽しかった、もっとやりたい」と言っていた。私はその女の子に聞いた。「どうしてそう思ったんだい」と。女の子は「わかんない」と一言。それ以上深堀はできなかった。女の子の中で、変化は確かにあった。だがそれを捉えることはできなかった。私はそこで、子どもの「声」、その奥にある真意を直接探るのは難しいと、愕然としたものだ。

そのことを10月カンファレンスで相談してみた。聞き方について言われ、同時に共感もされた。「声」から真意に迫ることについて、これは見とりを中心に行っている院生だけではなく、先生であれば常に悩まされることであると。大抵、変化というものは無意識だ。自分自身が成長を実感できることなんて、滅多にない。だからこそ先生は、子どもを見ている側は聞き方や状況に気を配って、真意を探ってい

なければならない。私の状況に照らし合わせてみれば、「おお、どういったところが楽しかったの」などと聞いていれば、少しは返ってくる反応も違ったことだろう。私にはそこが想定できていなかった。子どもの声の真意を探ろうと、必死だったことで焦りもあったのだろう。もう少しできることが、聞くための言葉があったはず。そう思わずにはいられないのだ。

見とりでは様々な子どもたちの側面を覗く。「声」だけではない。子どもの仕草や表現、ノートやプリントなどの感想。学びの変化を見とるというが、私たちからできることは何だろうと考えることがある。多くは「無い」と答えるかもしれないが、先の子どもに対する聞き方のように、推察をするために、それ以上に子どもの学びを確かめるために、私は何か手立てがあるのではないかと思うことがある。しかしそれはまだ、私の中で形になっていない。今は子どもの声を聞き、ノートなどを見るのに精いっぱいである。それでも今後、教員になっていくうえで、子どもたちの学びの変化をかき取るために、私は考えることをやめてはいけないと思っている。子どもの「声」に耳を傾けること、それはただじっと聞くだけではなく、子どもの思いや意図を引き出すことも、声を聞くことなのではないかなと思うのだ。

雑談も大切

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井県立高志高等学校

川嶋 海音

10月の月間テーマでは「世代を超えて話すことの難しさ」が取り上げられた。世代が違うということは、その人の“普通”や“当たり前”が異なるということであり、同じ言葉でも背景や価値観がまったく違う場合がある。実際に会話をしてみても初めて、自分が当然だと思っていたことが相手にとってはそうではないことに気づく。また、自分の意見や考

え方が他者からどのように受け取られているのかを客観的に知るきっかけにもなる。

こうした経験を重ねると、世代を超えて話すという行為自体が、実は非常に奥深く、相互理解のために不可欠であることを実感した。そのうえで重要だと感じたのが“雑談”である。一見すると雑談は必要のない会話、時間の無駄のように思われがちだ。

しかし、必要なことだけを話す関係では、お互いの本音や背景、価値観はなかなか見えてこない。むしろ、結論のない、目的が明確でないような雑談の中にこそ、その人の個性や考え方、意外な一面が表れる。

雑談は、相手との距離を縮めるだけでなく、自分自身の価値観を見直したり、相手との違いを自然に受け止めたりするための大切な時間でもある。このことは大人同士の関係に限らず、子どもや生徒との関わりにおいても同じである。教師や大人が「意味がない」と感じるようなちょっとした会話が、実は生徒を深く理解するための重要な手がかりになる。好きなこと、興味をもっていること、得意なこと、

最近の気持ちなど、形式的なやりとりだけでは見えてこない生徒の姿が、雑談を通して少しずつ明らかになる。雑談は何を話しても良いからこそ、相手が安心して心を開きやすい。こうした自由でくれたやり取りを大切にすることで、信頼関係が築かれ、互いの理解も深まっていく。

世代間のギャップを埋めるためにも、生徒との関係性を築くためにも、雑談は単なる“おまけ”ではなく、むしろ関係づくりの土台になるものと改めて感じた。意味のないように見える会話の中にこそ、人と人とがわかり合うための大切なヒントが隠れており、その積み重ねが、よりよい関係や安心できる場づくりへとつながっていくのだと思う。

10月カンファレンスを通して

ミドルリーダー養成コース1年/南越前町立南越前中学校

澤崎 直紀

10月カンファレンスのテーマは「新たな同僚を支え、世代を超えて学び合う」でした。

まずは、岐阜市立市橋小学校に勤務されている加藤敦子先生の実践報告を聞きました。大規模校で様々な先生が勤務されており、職場の課題や学校全体を動かすときに取り組んだ実践について教えてくださいました。課題として教職員の多様さや他学年のつながりが弱いことがあげられました。私も他学年のつながりについて共感することがありました。同学年の学級数が多い学校では横のつながりを強め、授業の内容や進度を合わせたり、行事についても学年で動いたりしています。そうすると、縦の関係を築いて他学年と動くということがなかなか難しくなります。子どもの成長を促すためには、子どもの発達段階と地域性、学校風土を学校全体で話し合い、学年ごとの目標を立てていくことが大切かもしれないと考えました。地域や学校が違えば、同じ学年の子どもであってもできることは変わって

きます。他学年とのつながりがなければ、その1年ないしは2年間で取り組んできたことが切れてしまい、これまでは当たり前のように行ってきたことを行う機会がなく、成長の機会が奪われてしまうことにもつながってきます。そのため、横のつながりだけでなく、縦のつながりを大切にしていけるとよいと考えました。とはいっても、なかなかまとまった時間をとることができないのも事実です。だからこそ、現職教育の場や有志による研修の場など、学ぶ機会を設けて時間を作り出すことが必要だと考えました。さまざまな先生がいて考え方も違うのですが、子どものためにということであれば、短時間でも参加してくれるはずです。子どもを成長させるという同じ方向を向いて取り組んでいくことで、職場の雰囲気もよくなり、加藤先生の言葉を借りると「先生が元気で笑顔で子どもと向き合うことができる」と考えました。

では、話し合いの場を設けるときに気をつけることは何かと考えました。ただ集まってもらって話してみましようでは、正直時間をかけた割には何も収穫がないまま終わってしまうということが予想されます。そのため、短時間かつ内容の濃いものにするためには、事前に準備がどれほどできるかが大切です。事前に目的や内容を示しておくだけでも変わってきます。また、加藤先生の取り組みの中でもあったように、学年の中で話し合いをしてもらった上で参加するという方法もよいかもしれません。そうすることで、経験が浅い先生にこれまでの経験を伝えることができたり、若い先生の新しいアイデアを引き出したりすることができるかもしれません。忙しい中での参加になるので、集まって話してよかったなとか楽しかったなと思って終えることができるのが理想です。若い先生に知識や経験を積んでもらい、悩みや相談を受け止めることができる関係を築いていきたいと考えました。そのためにも、私からコミュニケーションをとり、話を聞いて関係を作ることに努めていこうと改めて考えました。

関係を築いていくためには、学校という場に限定されることではないと考えます。先輩の先生や同僚の先生、後輩の先生と食事や飲み場に行くこともありだと考えています。最近の若い世代の人は、飲み会が嫌いだといわれていますが、仕事やプライベートな話について堅苦しくなく話することができる場でもあると考えています。幸いなことに、私の職場は交流することが好きな先生方が多く、よく飲みに行っています。その甲斐もあってか、先生方の仲がよく、学年や教科に関係なく、話すことができます。

先日、飲み会の終わりに代行をお願いして帰りました。運転手の方が、「最近の若い人はあまり飲みに出歩いておらず、飲んだとしてもソフトドリンクで自分の車で帰っているようだ」と話していました。スマートドリンクという言葉も広がっており、皆が自由に楽しめて関係づくりが進む場が何であれ、あるとよいなと思います。

「想いつていうのは言葉にしないと伝わらないのに」（山田鐘人作、アベツカサ画『葬送のフリーレン』小学館、2020）

寄り添う

ミドルリーダー養成コース2年/長野県岡谷市立岡谷北部中学校

中野 晃宏

中郷小学校の清水先生の実践報告を聞き、グループでは、生徒指導についての話が展開された。清水先生の話の中で、「これまででは、きちっとする、正すことが大切だと思っていた。でもそれは、子どもたちを自分の枠にはめようとしていたのではないかと思うようになった」という言葉から、私自身が今担任をしている特別支援学級の生徒たちを自分の枠にはめようとしていなかったらどうかと不安になった。子供たち一人一人の行動の裏には一体どのような気持ちがあったのだろうか。社会に出たと

きに困るということを盾に一方的な話になっていなかったらどうか。私自身の生徒との向き合い方を反省するのに大きな言葉であった。グループの中では、指導をする中で「こちらの考えを押し付けて言うことは楽だ」とさらっと出てきた言葉に、今までの自分は子供たちに自分の価値観を押し付けていて、実は楽をしていたのではないかということにまで気づかされた。

同じ職場の同僚たちに対してはどうであったらどうか。そのように振り返ったとき、生徒も先生も

同じで、自分が良いと思ったことを勝手に当てはめていたのではないかと感じた。活動のねらいや目的が大切であるということは確認していたが、それ以上にその大切であるということが、一人一人の先生に伝わっていなかった。そもそもこの取り組み自体が、先生たちにとって必要感のあるものであったのか。ねらいや目的は先生たち一人一人に沿ったものになっていたのだろうか。そのようなことを考えたときに、先生たちに一方的に推し進めていた結果が先生たちから、研修をする度に「この時間は何をやる時間ですか」という問いを生んでしまったのではないかと思えた。

今回の10月カンファレンスでは、なんのためにその取り組みをするのかを考えるのではなく、その取り組みは一緒に取り組んでいく人たちにとって本当に必要なことなのか、一緒に考えて生み出しているものなのか、独りよがりになっていなかったのだろうか、と考えることにつながった。子供たちも先生たちも寄り添って考え、一方的ではなく、互いに寄り添いながら歩んでいけるように心がけていくことが必要だと感じた。そのために、互いが考えを語り合えるようなそんな環境、授業を目指していきたい。

「探究的な学習」で変化する教師と子どもの学び

ミドルリーダー養成コース2年/新宿区立牛込第三中学校

古賀 めぐみ

東京サテライトラウンドテーブル 2025 で最も印象に残ったことは何かというと、宮古島久松中学校1年生との対話の中で聴いた「探究はワクワクして楽しかったです。普段の授業では消極的で先生にあてられないように下を向いていたクラスだったけど、探究を通して積極的に発言するようになりました。」という言葉である。この言葉の中に「探究的な学習」に取り組む意義が含まれているように思う。

今回のラウンドテーブルでは教師と子ども一堂に会し、それぞれの立場関係なくポスターセッションやラウンドテーブルでの対話を行い「主体的に学ぶ」ということについて考えることができ、自分自身の実践を省察する機会ともなった。第1部のシンポジウム・ラウンドテーブルでは東京都三宅村立三宅中学校と沖縄県宮古島市立久松中学校の生徒と教師による「主体的な学び」についての実践報告とパネルディスカッションが実施された。「MIYA 島プロジェクト」では約1800km離れた島の生徒がつながり、自分の島ではなく、互いの島の魅力について調査し、共有し合い、フィールドワークを通して自

分の島の魅力を再発見しパンフレットの作成を行っていた。ICTを活用し、オンラインでつながり島の魅力をお互いに伝えあったり、観光コースを考えたり、対話をするという機会を通して、決して関わることはなかったであろう東京と沖縄の島の子たちが「探究的な学習」を通してつながっていく姿に一種の感動を覚えた。このような学習では先生方の教育に向かうエネルギーが必要であり、おそらく生徒の「探究的な学習」を通して先生方自身が多くを学ばれたのではないかと思う。三宅中学校の先生は島に勤務して1年目、子ども達に「島の魅力は？」と聞くと「何もありません」と答えていたが、この学習を通して生徒が改めて島の魅力を発見してくれたことが嬉しいと話していた。そして先生自身が「探究的な学習」は「大変というよりも楽しかった」と語っていたのが印象的であった。生徒も先生もワクワクしながら取り組める探究的な学習の魅力を本校の先生方とも分かち合いたいと改めて思った。

ポスターセッションでは院生だけでなく、こども園の4歳児、宮古島・三宅島の中学生、埼玉県立小

川高校・東京大学附属中等教育学校・保善高校・二松学舎柏高校の生徒も参加し、盛大に開催された。参加したいセッションが多くあり迷うほどであったが、小川高校の「和紙の技術を世界へ」の発表に参加した。「日本とインド、韓国のゴミ箱に対するイメージや使い方を比較しながら、世界中で愛されるゴミ箱のデザインを探究する！」がテーマだ。発表者は小川町の特産である和紙と工場から出る廃材を活用して作成したゴミ箱を実際に海外へ持参し調査を行った内容を語ってくれた。通っている学校の地域の特産を用い、企業の協力を仰ぎ作成過程では社員の方とも対話を行い、作成したゴミ箱をインドへ持参し調査を行うなど、教室を飛び出して学びを深めていく過程は大変さはあっても「ワクワク」や「楽しさ」が上回っていただろうということが彼らの話しぶりから分かった。

昨年度と展開が異なった東京サテライトラウンドテーブルは子ども達の生き生きとした姿が見られ、さらに自身の実践の振り返りにもなった。

本年度、本校の第1学年でも「探究的な学習」に取り組むことにした。本来は学校全体で実施した方が教育的効果は上がるが、諸事情により第1学年の

みでの取り組みとなった。勤務8年目になるが比較的、穏やかな学校でトラブルもなければ刺激もなく、大きな変化もなく過ごしてきた。変わりつつある学校教育の中で教師主導の授業が展開され、総合的な学習の時間も学校行事の事前・事後学習における調べ学習と発表を行うというスタイルである。そこで所属する第1学年から「探究的な学習」への取り組みを実施し、情報を発信することで少しでも周囲の先生方の刺激となれればと考えた。しかし、第1学年の教員も私自身も「探究的な学習」は初めてで、試行錯誤しながら取り組もうとしている私たちの言葉は狭い職員室の他学年の先生方にも聞こえていると思う。うまくいくことばかりではないが、第1学年の先生方との話の内容に変化が表れてきた。職員室で飛び交う言葉が、雑談や不平不満だけではなく生徒の成長のための前向きでポジティブな言葉にしていくためには、教師自らが挑戦し続けることが必要である。そして、教師が学ぶ姿は生徒にも良い影響を与えるであろうと思っている。第1学年の「探究的な学習」への取り組みが牛込第三中学校の進化につながることを期待しながら、来週の総合的な学習の時間に臨もうと思う。

10 月カンファレンスの振り返り

学校改革マネジメントコース1年/株式会社 COMPASS

小森 由貴

10月のカンファレンスでは、敦賀市立中郷小の清水先生の実践発表から始まり、様々な先生とお話することができた。1回目のセッションでは清水先生の実践を振り返りながら、それぞれの先生方の実践や課題感などをお伺いしていたが、大きくテーマが2つとなった。「同僚性をどう培うか」と「対話とはどういうものか」である。

先生方はどちらかといえば管理側の立場なので、同僚性を培うための仕掛けや仕組み（職員室のフリ

ーアドレス制や任意での研修など）をさまざま検討しており、うまくいっていることもあれば改善の必要性もあり、それは私自身の業務とも関わる部分が大きく、共感しながら話を伺った。また、その中から「対話できる場」や「対話の必然性」という話題となり、「よい対話とはなんだろうか」というテーマに移ることとなった。

「自由の相互承認を目指す」「話している中で自分に対する気づきがあるか」「やはり省察であろう」

と話題が盛り上がったが、よい対話にするには、適切な場の設定（自己開示できる心理的安全性や、互いに傾聴するスタンスなど）が重要なのだと改めて整理することができた。

また、2回目のセッションでは教員の評価、モチベーションの話題で盛り上がった。企業における評価指標やフィードバックと教員の評価は大きく違いがあった。評価はマネジメントに直結する。企業で働く私から見ると、学校組織の評価はわかりづらく、マネジメントが難しそうだなと感じた。

この半年、大学院で学ぶ中で、『学校を変えていく＝組織改革』に他ならないと認識するようになった。その中で「対話」というキーワードが魔法のように使われていると感じていた。対話の場を設定するのはよいが、適切な自己開示や気づきを得るにはどのような準備やポイントが必要なのかを知りたく、今回先生方とディスカッションすることができてよかった。

ベースとして傾聴（相手の意見を丁寧に聞く）と自身の省察があり、着地点の1つとしては本質観取もポイントになりそうだと感じた。ちょうど最近読んだ新聞記事で「意見の異なる相手の主張を聞く訓練をする」という話をマイケル・サンデル教授もしており、まず聞くという姿勢の重要性を改めて認識した。

[参考：マイケル・サンデル教授、教育の場で「聞く力養成を」分断深める SNS を語る - 日本経済新聞](#)

また、今回2回目のセッションでお二人の女性の校長先生と同じグループになれたことで、評価におけるジェンダーの特長まで話ができ大変興味深かった。全体的に教員の評価のつけ方は低めの傾向がありそうだが、特に女性がその傾向が強いとすると、リーダー育成などを意識的にやっていないと女性リーダーが増えないかもしれないと感じた。企業でも同様の課題は多く、現在、副業で（※）女性支援のメンターを実施している。教員組織は比較的男女の差は大きくないと感じていたが、リーダーの数はまだまだ男性が多いため、そういった支援があってもよいかもしれない。あまり教職大学院でジェンダーについて考える機会がなかったが、非常によい機会になった。

半年学ぶ中で、これまでよりも学校現場における課題感の解像度が上がってきていると感じる。私自身は学校外の組織からどのように支援できるのかを考える立場だが、適切な現場理解と適切な違和感を持ちながら、引き続き外から見る学校組織を考えていきたいと思っている。

（※）女性支援のメンター：企業やNPOが提供しているサービスで、同じ社内にロールモデルがおらず、女性が相談するリーダーが乏しいことから、社外の女性リーダーをメンターとしてマッチングするサービス。

共にまなざす世界を創る

学校改革マネジメントコース1年/春日保育園

近藤 直子

公立高校に勤務していた当時、組織は教育委員会を頂点にピラミッドのようだと感じていた。教員は評価され、管理されていた。ただ、新卒で勤務した公立小学校より高校のほうが、自由度が高く、息を

するのが楽だった。運営委員になってからは、自分の思いを学校経営に反映させることもできた。分掌の長として、子どもの活躍できる場を作ることもできた。

若手教員と語り合うこともできた。しかし、学校経営案はあるものの職員全員が同じ方向を向いているとはいえなかった。

早期退職して飛び込んだ保育の世界も保育経験を積んだ保育士が上に立っていた。「私の保育観は」という枕言葉をよく聞いた。また、なにか決め事があると「上が決めてください。」「上が言うことなら。」ということも言われた。上手くいけば当たり前。いかなければ管理職批判となった。それぞれの責任が自分事になっていなかった。以前と同じだなと思った。

副園長として園の運営に携わって6年が経った。とにかく園を良くしたかった。私は保育の経験がない。その私が発する「子どもの人権や子どもの主体性を尊重する丁寧な保育」は現場にはなかなか響かないと感じた。むしろ「保育のことなんにも知らないくせに」という陰の言葉も耳に入った。どうすれば、良くなるのだろうといつも考えていた。保育士の外部研修は、復命書や職員会議で形式的に報告されるだけで、職員全体で共有されているとはいえなかった。

園の保育理念は、年度の最初に作る保育課程に記載する。その理念に沿って年間の保育目標、月の保育目標、週の保育目標、それぞれの指導案がノルマのように作成される。保育士は、自分の担当箇所の日々の保育日誌、子どもの経過記録、サポートプランなど膨大な資料作成にかなりの時間を取られていた。しかも手書きでの作業であり、紙での保存となっていた。（作業に忙殺されている）と思った。保育士たちは、黙々と机に向かい記録を書いていた。もっと合理的にできないのか、もっと話せないのかと考えた結果、書くスペースを小さくし思い切っって量を減らした。書き直しや振り返りが容易にできるようICT化も進めた。内容もエピソードと考察に変えた。

子どもの午睡中に行われていた「書く」という文化を「話す」文化に変えること。そこが子ども理解への一つの道だと考えた。子ども理解は、記録を残

すだけではなく、他者と話し、自身を振り返ることで深まるものだと思う。

「話す文化」を根付かせるために、昨年からは園内研修で「かすがラウンド」を始めた。普段なかなか交流のない幼児クラスと乳児クラス、若手とベテランなどをグループに組んだ。そして、日々の保育についての困りごとや悩みやそれをどうしたらいいかなど、話しやすいことから始めてみた。

思いがけない反応が起きた。堰を切ったようにみんながしゃべりだしたのだ。

初任の保育士が言った。

「普段しゃべったことのない先生と話ができました。悩みを聞いてもらえてうれしかったです」

そうなのだ。みんなしゃべりたかったのだ。環境を作り出すとはこういうことかと、小さな一歩を踏み出すことができた。

今年になって、幼児のクラスの壁を取り払った。今までロッカーで仕切っていた保育室を、オープンスペースにしたのだ。春日保育園は1クラス15人で0歳児から5歳児までの子どもたちを保育している。壁を取り払った理由は異年齢保育を充実させたかったのと、スペースの有効利用をしたかったからだ。

思いもかけないことがおきた。子どもたちは自然に交わり、今まで保育士に頼っていた3歳児が、4歳児、5歳児を頼ったりするようになった。5歳児は、下の子どもたちを可愛がるようになった。しかし、想定していなかった大きな変化は、保育士のチーム力が格段と上がったことだ。ロッカーが取り払われたことにより、自然に集まり、会話が増え、午睡中には保育の振り返りや保育計画について、話し合われるようになった。日々の会話は、年齢や経験を超えて弾んだ。

50代のベテラン保育士が生き生きとした顔で言った。

「今までで、一番楽しい。こんなにみんなで話し合ったことはなかった。若い人っていろんなアイデアを持っていてすごいねー」

話すことで、子どもへのまなざしが共通になってくる。

ー春日保育園の大切にしている保育ってこんなことかなー

ー子どもの「やってみたい」にどう関わっていけばいいかなー

話し手と聞き手の役割を往還することで、見えてくる世界があると思った。

夕方、お迎えの保護者に、その日の子どもの様子を伝える時も、自然とそんな話になる。保護者と子どもへのまなざしが共通になってくるのだ。子どもをまんなかにして、まなざす瞳が温かい。

私は、子どもをまんなかにして、保育者と保護者、そして地域の人々が「共にまなざす世界を創る」ことをみんなで考えて実践していきたい。この4月からの大学院での学びは、私の世界を広げてくれた。共に学ぶ仲間がとても大切に思える。学ぶことが出来るという幸せを胸に温め、子どもたちに向き合っていきたい。



お知らせ

Schedule

11/22 Sat.	11月月間合同カンファレンス A 日程
11/29 Sat.	11月月間合同カンファレンス B 日程
11/30 Sun.	入試説明会
12/26 Fri. - 28 Sun.	冬期集中講座 a 日程
1/4 Sun. - 6 Tue.	冬期集中講座 b 日程
1/10 Sat.	予備日
1/31 Sat.	長期実践研究報告締切
2/7 Sat.	第1回入試
2/8 Sun.	長期実践研究報告会 9:30-12:30
2/21 Sat. - 22 Sun.	ラウンドテーブル
2/28 Sat.	第2回入試
3/10 Tue.	運営協議会(オンライン)
3/24 Tue.	学位記授与式 学位記伝達式 18:00-20:00

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
 修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
 関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。



【編集後記】今回、「200号発刊に寄せて」と題して、多くの修了生の方から原稿をいただきました。教職大学院の学びを振り返り、そこから今の立ち位置までの自分史を辿る書きぶりは、まさに長期実践記録の続きを読んでいるような感覚になりました。これらの実践記録（あえてそう言わせていただきますが）は、200号までの積み重ねの賜物であり、その重みをひしひしと感じています。「コースだより」では院での学びを職場で生かすためのチャレンジ、「インターンシップ／金カン報告」ではストレートマスターの率直な思い、「月間カンファ等の報告」ではカンファレンスを通しての新たな学びが、それぞれにじみ出ており、まさに「記録」と「対話」が満載のニュースレターになっています。（S.K.）

教職大学院 Newsletter **No.200**

2025.12.5 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院
 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学
 連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp